LOST COIN　-tail-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＳＴ　ＣＯＩＮ　－ｔａｉｌ－

【Ｎコード】
Ｎ３６６５Ｃ

【作者名】
早村友裕

【あらすじ】
初代グリモワール国王ユダ＝ダビデ＝グリモワールは７２の悪魔を召還し契約の証にコインを作った。それから数百年の時が流れ、王国が所有するコインの数はわずか１７にまで減っていた。現国王ゲーティア＝ゼデキヤ＝グリモワールは５名の天文学者に、失われた５５個のコイン――ロストコインを集めるよう勅命を下した。それが今からちょうど３年前の話――

SECT．1　闇ニ潜ム者（前書き）

この物語は連作です。

【LOST COIN －head－】 http://ncode.syosetu.com/n3660c/
【LOST COIN －tail－】 （本作）
【LAST DANCE －head－】 http://ncode.syosetu.com/n4082c/
【LAST DANCE －tail－】 http://ncode.syosetu.com/n4617c/
【PAST DESIRE －head－】 http://ncode.syosetu.com/n6324c/
【PAST DESIRE －tail－】 http://ncode.syosetu.com/n7899c/
【WORST CRISIS－head－】 http://ncode.syosetu.com/n0921d/
【WORST CRISIS－tail－】 http://ncode.syosetu.com/n0973d/

順にお楽しみください。

SECT・1　闇ニ潜ム者

上官の元へ向かう途中、闇の中に敵を見つけた。
左手で長剣を抜刀し、問答無用で切りかかる。
「マルコシアス！」
間髪いれず幾多の困難を共に切り抜けてきた戦友の名を叫んだ。
同時に足元には黒々とした魔方陣が出現し、自分の頭上には純白の翼を持った褐色の肌の剣士の上半身が揺らめくように現れる。
褐色の肌の戦士――マルコシアスは炎妖玉（ガーネット）と碧光玉（サファイア）が一つずつ嵌め込まれた瞳を細めた。
「珍しいな　セフィラか」
「そうです！」
暗闇でもわかる敵の銀髪を目印に、静まり返った真夜中の街を駆け抜けた。
敵は銀のブレイドを閃かせて身軽に夜の街を駆ける。壁を蹴って屋根に駆け上がり、そのまま屋根の上を跳んでいく。
「逃がすか！」
マルコシアスの力を借りて、空に飛び上がった。腰まである黒髪が風に靡いた。
軽く屋根を凌駕して銀髪の姿を追う。マルコシアスの加護を受けている今人間相手に勝てないはずがない。
特に今は夜、セフィラの力は使えないはずだ。
すぐに追いついて左手の剣を振り下ろした。
敵である銀髪の男は銀ブレイドでそれをはじき、さらに攻撃を仕掛けてきた。
横から凪ぐような攻撃を逆手にとって懐に入ると、剣の柄で腹部に強烈な打撃を加えた。
「かっ……」
衝撃で銀髪の男を吹っ飛ばした。

屋根から落下した敵を追って即座に飛び降り、さらに一撃を加えた。
「がごお……ん！」
落ちた路地裏で再び空に舞った敵は、すさまじい音を立てて壁に突っ込み地面に伏せて動かなくなった。
「完全に　気を失ったようだ」
「……そうらしいですね」
ゆっくりと銀髪の敵に向かって歩を進めようとすると、そこへすばやく影が飛び込んできた。
突き出された銀のブレイドをすれすれでかわすと、さらにその影は攻撃を仕掛けてきた。
「がっ　ぎぃん」
数合打ち合った後距離をとった。
まだ敵の仲間がいたとは……油断した。
が、後から飛び込んできた仲間の顔を見て声を失った。
「なっ、お前……！」
先ほど路地裏に叩き落した敵と全く同じ顔だったのだ。群青の瞳も陶器のように滑らかな白い肌も少し青みがかった銀髪もそっくりそのまま同じだった。
同一人物かと思ったが、先ほどの敵は完全に沈めたはずだ。それはありえない。
もう一人の銀髪は吼えるように叫んだ。
「『音』に手を出すな！」
敵意をむき出しに飛び掛ってきたもう一人に困惑しながらも立ち回る。
壁を駆け上がり屋根を蹴り、街中を縦横無尽に飛び回った。
そして気がつけば微かに空が白んできていた。
「くそっ！」
街の人間にこの戦いを見られるわけには行かない。
どうする……？

その一瞬の迷いを突いたのか、銀髪の人間は目の前から姿を消していた。
「油断したな　アレイ」
「逃がしてしまいました」
「また　剣を交えるときが来るだろう　我は一旦魔界へ退く」
「はい。ありがとうございました」
朝日が昇るのと同調するように褐色の肌にオッドアイの戦士の姿は掻き消えた。

SECT．２　面影ニ映シテ

朝日が昇りきる前に宿に戻らなくては怪しまれる。
窓から隠れるように部屋に侵入し、侵何もなかったかのように宿をチェックアウトした。
太陽の光に溢れ始めた街に出て、ひとつ大きく深呼吸する。灰色の石畳は光を反射して眩しかった。
何にせよ、とりあえず倒した方の銀髪を捜さねば。
闇色のマントを羽織って歩き出した。これは先代から引き継いだものだ。先代もマルコシアスを使役して王国のために尽力したらしい。

まず昨晩の路地裏に向かおうとベージュの石畳のメインストリートを歩いていると、おかしな少年が目に入った。
いや、遠目には少年に見えたが近寄ってみると２０にはほんのわずか届かないくらいの少女だった。
大きな漆黒の瞳をきらきらと輝かせながら、やたらと派手な色をしたインコに何か熱心に話しかけている姿はまるで幼い子供のようだ。
水色のバンダナで隠れていて髪の色はわからないが、袖から伸びる手足は象牙色ですんなりと伸びている。
何より、屈託なくこぼす笑顔に思わず視線を釘付けにされた。
「ちびマスターはいつもつれないな！」
よく分からない台詞を吐いて、少女は派手なインコにひらひらと手を振りながら駆け出した。
風に逆らわず自分の真横を駆け抜けていった。
おかしな奴だ。
特別気に留めるようなことでもなかったのになぜかとても気になった。

子供のように笑った顔が脳裏に焼きついてしまった。
おかしい。こんなこと今までなかったのに。

昨日セフィラと戦った場所までの道は覚えている。一度通った道を忘れることはない。
だが……
「逃がしたか」
路地裏に銀髪の男の姿はなかった。
代わりに血が転々と落ちており、かなりの重症であったことのみがわかった。
仕方がないので、当初の目的だった上官の元へ向かうことにした。予定より少しばかり早いが彼女には許してもらえるだろう。
世間一般的に言えば文句なしに美女と呼ばれる容姿をしている上官は、その容姿を生かして表の顔として情報屋とバーの店主を装いながら、王命を受けた3年前から確実に任務をこなしているのだった。

ベージュの石畳は再び灰色に戻り、市の開かれるメインストリートとは違ってあたりの人影も減ってきた。
このあたりは飲み屋街だ。
そのうち一軒の酒場を選ぶと半分地下のその店に入っていった。
「あら、アレイ。早かったのね」
カウンターの向こうから明るいメゾソプラノが投げかけられた。
ちょうど洗い物の最中だったらしくカウンターの向こうからは水音がしていた。
久しぶりに会う上官は以前会ったときと変わらず美しかった。
腰まであるストレートのブロンドに縁取られた白い頬、気まぐれ猫のような金の瞳、それに絶妙なカーブを描くこの体のラインで幾多の客を獲得してきたんだろう。
カウンター席に腰掛けると、上官は湯気のたつコーヒーを出して

くれた。
それを一口含んで挨拶を抜きに本題に入った。
「昨日……セフィラに会った」
「！」
上官はそれこそ猫のような目を吊り上げた。
「夜中だ。街に入ってからおかしな気配がしていた」
「……なんて事」
上官は頭を抑えた。
「こんなご時勢とは言え、困ったわね。とりあえず王都に報告するわ」
「すまないがその間少し眠らせてもらえるか？」
「いいわよ」
店の奥には簡素なベッドがいくつか並んでいる。酔いつぶれてしまった客を寝かすためのものだろうが、いつもこのベッドで仮眠を取るのがここに来たときの儀式のようなものだった。
「夕方には起こすわ。いろいろと話したいことがあるの」
「了解した」
上官を後ろに見送って、奥の部屋に入る。
変わっていないベッドの一つに寝転がると、瞼の裏に焼きついた先ほどの少女の姿が浮かんできた。
なぜ、こんなに気になるのだろう。
あの漆黒の瞳が、屈託のない笑顔が焼きついてはなれない。
なぜだろう。
「一体何なんだ……」
自分に課せられた仕事はただ一つ、失われたコイン――ロストコインを探し出すことのはずだ。それ以外のことは考えなくてもいい。
少女の面影を消そうと腕を目の上に当てて寝転がっていると、上官の女性がやってきた。
「どうかしたの？　他にも何かあった？」
「いや……先ほど少女を見かけたのだが、いや、おかしな少女でイ

ンコに向かってなにやら熱心に話しかけていた。」
たったそれだけの情報で、上官はぽんと手を打った。
「あら、もしかするとそれ、私が引き取って育ててる子かも知れないわ」
「あれが？」
「ラックって言うのよ。あの子がどうかしたの？」
「いや、なんでもない。わざわざねえさんに言うことでもない」
あの少女の笑顔が頭から離れないんだ、などと言ったら根がサディスティックな上官のことだ、何を言われるかわからない。
ちなみにこの上官は血縁関係のある姉というわけではないが、姉御肌の気風のよい性分だからねえさんという呼び方があっている気がして、いつしかそう呼ぶようになっていた。
「かわいい子でしょ？　とっても素直ないい子なのよ」
その形容詞はとても２０歳近い少女に与えられるものではなかったがあの少女の笑顔にはよく似合っている気がした。
「夕方前には帰ってくるわ。少しくらいなら顔を合わせてもいいわよ」
「いや、いい」
特別気にすることなどない。
一時の感情で揺らぐことなどない。
「それじゃ、起きたら店のほうにいらっしゃい」
「ああ」
上官はそれで出て行き、自分も仮眠をとるため本格的にベッドに横になった。

夕方は上官の声で起こされた。
「ごめんなさい、ラックが帰ってこないの。もうとっくに戻ってもいい時間なのに……」
ラックという名を頭の中で検索する。

そして、それがあの漆黒の瞳の少女だとわかって覚醒した。
「何かあったのかしら。こんなこと初めてだわ」
これまで見たことがないほどに狼狽した様子の上官は、まるで子を持つ親のようだった。
「今から探しに行くの。アレイ、手伝ってくれる？」
「かまわない」
「ありがとう」
外に出る支度を整えて店に出ると、上官が早口でまくし立てた。
「肩にかかるくらいの黒髪で黒い瞳がぱっちりした、笑顔がかわいい18くらいの女の子よ。華奢な感じで肌は象牙色。話し方は少しおっとりしているけど、男の子みたいな格好をしているからすぐにわかると思うわ。見つけたらすぐに連絡を頂戴」

街中をかなり探した。真っ赤な夕陽に照らされた街並みはとても温かく心地よい空気で満たされていた。
店じまいの準備をしている場所がほとんどで、勤め先から帰るのであろう人々の姿もちらほら見える。
だが少女の姿は影も形もない。
日が西に沈んでしばらく、一度店に戻ることにした。
「アレイ、お帰りなさい……」
暗い響きを含んだ上官の声が出迎えた。
「いないのよ、あの子……街の人たちの話だと、昼にはもう姿を消していたらしいわ」
金の瞳には絶望の色が濃く映っている。
「考えたくないのだけれど、あの子、セフィラにつかまったかもしれない」
「セフィラに？　なぜ？」
「……」
上官は口をつぐんだ。
肩が震えている。

「なぜなんだ？」
もう一度ゆっくりと聞いた。
「それは……あの子が……」
上官は恐ろしく信じがたい言葉をつむぎだした。
「一私たちが探しているもの《・・・・・・・・・・・・》を持っているからよ。」
一瞬反応できなかった。
だが、探しているものといえば一つしかない。
「あの少女がロストコインの持ち主だというのか？」
「ええ、そうよ」
上官の青ざめた顔がひどく印象的だった。
「いったい」
「お願い。あの子を探して。下手をしたら殺されてしまっているかもしれないわ……」
「何のコインだ」
「後で全部話すわ。あの子が帰ってきさえすれば」
「……」
聞きたいことは山ほどあった。
なぜロストコインを見つけたのに国に報告せずずっと持ち主の少女を育てていたのか。その少女の持つコインは何番目か。
しかし、上官の必死さが嫌というほどに伝わってきたから、夜が明ける前に店を出てもう一度少女を探すことにした。

まさかこんなことになろうとは。
いや、これはただの始まりで、あの少女とこの先長く付き合っていくことになろうとは夢にも思っていなかった。
ただ、まぶたの裏に焼きついたあの屈託のない笑顔だけが闇夜の明かりのように輝いていた。

―――　ハジマリ　―――

ディアブル大陸の西岸を支配するグリモワール王国。
穏やかな気候と豊かな大地を有するこの王国は５００年近く前に初代国王ユダ＝ダビデ＝グリモワールが建国して以来おのおのの時代の賢王に守られて安定を保ってきた。

それを支えたのは、国に仕える天文学者と呼ばれる者たちだった。
彼らはその名の通り天に浮かぶ星や月、惑星の動きから未来を読みそれを国政に反映させた。その優れた占星術で大災害も隣国の反乱も事前に察知し、グリモワール王家に繁栄の時代をもたらした。

しかし彼らが駆使したのは占星術のみではなかった。
初代グリモワール国王ユダ＝ダビデ＝グリモワールは稀代の天文学者ゲーティア＝グリフィスと共に、７２の悪魔を魔界から召還した。
悪魔それぞれと契約した証に全部で７２のコインを作り、７２人の天文学者にそれぞれ与えた。
コインは悪魔の持つ力を具現化する。王家に仕える天文学者たちはその悪魔を呼び寄せて、その能力を使役してきたのだ。
天候を操る能力、過去や未来を知る能力、戦いの力、人の心を操る能力――７２の悪魔の力は恐ろしく強大で抗いがたいものであった。
その絶対的な力への畏怖もあって国内も隣国でもほとんどグリモワール王国への反抗を企てるものはいなかった。いや、企ては秘密裏に処理されたというのが正解かもしれないが。

しかし、何百年もの時は流れ、王家が所有するコインの数はいつしか減っていた。
７２人いた天文学者も今ではわずかに５名、所有するコインは１７にまで減ってしまった。
太古の天文学者と同じ名前を授けられた現国王ゲーティア＝ゼデキヤ＝グリモワールは５名の天文学者に、失われた５５個のコイン――ロストコインを集めるよう勅命を下した。

それが今からちょうど３年前の話――

SECT．3　発見セシ者ハ

おそらく街の中にはもういないだろう。そう踏んで隣町へ向かう林道を駆けた。
頭上ではすでに太陽は顔を見せ始めていた。
深い森の中の道を駆け抜けつつ、周囲に目を凝らした。
いくら上官に頼まれたとはいえ、これほど必死になって少女を探している自分は少しおかしいと思う。普段なら絶対にこんなことはないと言い切れる。
それでも足を止めず、ひたすらあの笑顔を探している自分がいた。

そして、それは偶然だった。
木々の隙間に見覚えのある銀髪を捕らえたのは。
よろよろと歩いているところを見ると昨日の傷はやはり深かったらしい。ただ、もう一人同じ顔がいるようだからそれだけ用心せねば。
息を潜めて近づいていくと、林の向こうに何かが見えてきた。
白い壁、屋根の上の十字架――あれは教会だ。
もう使われていないのか、遠目にもずいぶん寂れた印象だった。
「そうか。あれが拠点か」
少女を探していて思わぬ見つけものをした。
そう思ってゆっくりと境界に近づいていく。
と、思った瞬間銀髪の男は駆け出した。
気づかれたか？！
が、どうやら違うようだ。
「『光』！」
誰かに呼びかけている。どうやらもう一人もいるらしい。
一気に距離をつめた。
「『光』、レメゲトンを！」

「わかってる」
その言葉に愕然とした。
今確かにレメゲトンと言った。
レメゲトンというのは自分や上官のように国に使える天文学者に与えられる称号だ。コインを使って悪魔を使役する者たち。
あの子が私たちの探しているものを持っている、と上官が言った。
いろいろな思考が一瞬で積み重なって一つの答えを導き出した。
あの少女がそこにいる。
「マルコシアス！」
判断した後は一瞬だった。
戦いの悪魔マルコシアスを呼び出して一気に銀髪の二人に切りかかった。

銀髪の二人はやはり相当なダメージを受けていたらしく、すぐに退いていった。
追うか迷ったが今は少女のほうを優先したかった。
「これがねえさんの言っていた『ラック』か……」
草を踏んでゆっくりと近づいた。左手と服が真っ赤に染まっている。
「怪我をしているのか？」
完全に気を失っているようだ。
傷を確かめるために膝をついて近づいた。
昨日の朝見たときは着けていたはずの水色バンダナは取り去られていて、艶やかな黒髪が緑の地面に広がっていた。
その黒髪に縁取られた顔に釘付けになった。
長い睫が影を落としている。象牙色の肌は吸い込まれるように滑らかで、バランスの取れた桃色の唇は微かに開いている。血に染まる首筋は華奢で今にも壊れてしまいそうだ。
血まみれの服と左腕が壊れた人形のような危うさを与えていた。

まるで少しでも衝撃を与えると割れてしまう繊細なガラス細工のようだ。
しばらくその少女に見とれていた。
硬くまぶたを閉じたその顔と、今もはっきり脳裏に焼きついている子供のような笑顔が交互に浮かんだ。
欲望に耐え切れずに象牙色の頬にそっと触れた。
少女は身じろぎもしなかった。
滑らかで冷たい感触に、心臓の拍動が一気に跳ね上がった。
「……ぁぁ……」
そして、唐突に理解した。
きっと自分はこの少女にすでに惹かれ始めているんだ、と……。
なぜか必死で探したのも、これほど触れたいと思うのも、血にぬれた頬さえ愛おしいのも、きっとそのせいだ。
全く自分が信じられなかった。
話したこともない、まだ2度見ただけの少女にこんな感情を抱くとは。
しかしその感情を詳しく吟味する前にやることがあった。
とにかくこの少女を連れ帰って手当てをしなくてはいけない。左腕は相当な深手だ。下手をすると手が生涯動かなくなってしまうほどの深い傷を追っている。首の後ろにも十字架に裂傷が刻んであった。
「セフィラの印か……」
これはセフィラ――敵国セフィロトの天文学者がターゲットに刻む印だ。この少女はすでにセフィラの的となったことを意味している。
それはとても危険なことだった。
布を裂いて簡単に止血し、少女を抱え上げて街へと歩を進めた。
腕の中にある少女はあまりに軽くて、このまま浮かんで彼方へ消えてしまうのではないかと不安になるほどだった。
どうしてこんなにも強烈にこの少女に惹かれているんだろう。

とても憂鬱で、でも心のどこかに明かりが灯ったように暖かかった。

SECT．４　解セヌ思イ

案の定左腕の傷はかなり深く、何針も縫った。もう元のように手を動かすのは困難だろうと医者が言った。
少女の容態が安定したのを見て切り出した。
「聞かせてもらおうか、ねえさん。あれは何者だ？」
「……あの子は、３年前にここから少し離れた山の中で拾ったの。その時には記憶をすべて失くして、持っているのはただ一つのロストコインだけだった」
「何のコインだ？」
聞くとねえさんは一瞬躊躇ったが、ゆっくりと告げた。
「……第２５番目の悪魔、グラシャ・ラボラス」
「？！」
その名を聞いて驚いた。
７２枚あるコインのうちもっとも残忍で強大な力を持ち、使役するのが困難だといわれているグラシャ・ラボラス。
知っている限りで使役したのは稀代の天文学者ゲーティア＝グリフィス本人のみだ。
「３年間も？　国にはまったく報告していないのか？」
「……してないわ。だってもう何十年も前に無くなったと思われていた滅びのコインなのよ？　今さら見つかって、いったいどうするというの？」
「国王はそれを望んでいる」
「私はあの子をそんな世界に入れたくないのよ。」
「だが、戦になるのは時間の問題だ。その時グラシャ・ラボラスの力がどれほど切望されると思う？　どれほど有効に働くと思う？」
「そういう問題じゃないわ！」
ぴりり、と空気が揺れた。
その時だ。少女が微かに動いたのは。

「……ぅ……」
「ラック！」
上官は――ねえさんは必死でベッドにしがみついた。
「ねぇ、ちゃん」
「よかった……」
ねえさんはほっとした表情を見せた。
少女はたどたどしく言葉をつむぐ。まだ回復していない様子がありありと見て取れて、胸が締め付けられるように痛んだ。
「だいじょうぶ？　顔色・・・あんまりよくないよ？」
少女は起き上がるどころか意識を保つ事すら危うい自分のことを差し置いてねえさんの心配をしている。
いったいどうしたものか。
「ばかね」
ねえさんは小さな子供にするように少女の額に手を当てた。
少女は嬉しそうに笑った。
その微笑にどきりとした。最初に見た笑顔を同じだった。
「休みなさい」
「ねぇちゃん」
「なあに？」
「銀色のヒト……見たよ。すごくきれいなヒト……路地裏に落ちてた。」
それはセフィラだ。お前を狙う敵だ。
「そう」
「そんでね、壁が壊れてて……怪我してて……も一度……会いたい……」
「分かったわ、分かったからラック、今は眠りなさい」
「うん。いっぱい話したいこと……ある……よ……」
それっきり少女はまた眠りに落ちたようだ。

もう一度会いたい。少女ははっきりとそう言った。
信じがたいことだ。左腕の傷も首筋の印も銀髪のあのセフィラに付けられたのだというのに。何より殺されかけたというのに……
「どうしたの、アレイ。難しい顔して」
「……理解できない」
青白い顔でベッドに横たわる少女は失血で一時生死の境をさまよった。
心底理解できなかった。
死ぬほどの怪我をしているのに他人を心配して微笑む理由も、次会えば命を狙われる相手に会いたいという心理も、それから少女の笑顔を思い出すたび自分の中でくすぶるこの妙に暖かい気持ちの根源も……
「何か悩んでるみたいね。聞かせてもらってもいいかしら？」
「……」
少し悩んだが、この少女のことはねえさんが一番よく知っているはずだ。
言葉を選びながら慎重に口を開いた。
「分からないんだ。命を狙っている相手に会いたいって言っているのが……いったいこいつは何を考えているんだ？」
「そうね、それは私にも分からないわ。ただ、この子は自分の気持ちにとても正直なの。この子が会いたいと言うのならそれ以上の理由はないはずよ。きっとあのセフィラに何か通じるものがあったんでしょうね。もしくは……何か言われたのかしら」
ねえさんが横たわる少女をいぶかしげに見つめる。
呼吸は安定してきたようだが、まだ血がだいぶ足りないはずだ。まぶたは硬く閉じられていた。
「いずれにせよ理解できん。しかも死にそうな怪我を負っておきながら他人の心配をするのも。自分の身は完全に後回しじゃないのか？」
「ラックはそういう子よ。いつだって人のことを優先するわ。天真

爛漫で自分の欲望に忠実なように見えてその実、自分以外を大切にしすぎるわ。傍から見ていて胸が痛むほどにね。でも――怖いの。いつかそんなことをしていたらこの子が壊れやしないかって。だからどうしても国に報告できなかったのよ」
「だがもう隠し通すのは無理だろう」
「そうよ。でも、私はあの子の傍を離れない。絶対よ。何が起きてもあの子を守り抜いて見せるわ……！」
ねえさんの瞳に意思の光が灯った。
こんな時のねえさんは猫じゃなく、黄金のきらめきを持つ帝王の瞳の輝きを見せる。他を圧倒するオーラ――さすがはレメゲトンを束ねる立場にあるだけのことはある。
「3年前に拾ったと言っていたな。それ以前のことは全く分からないのか？」
「ええ。全く、何も。グラシャ・ラボラスのコインを持つ以上グリフィス家の末裔であることは間違いないと思うのだけれど、それ以上は分からない」
「だが、グリフィス家はもう何代も前に途絶えたんじゃなかったのか？」
「記録ではそうなっているわね。でも、実際には追放という形を取っているわ」
「追放？　いったい何をしたらグリモワール王国で最も強大な一族が王都を追放されることになるんだ？」
「彼らは、国家反逆を企て、72のコインとは別に悪魔を召還しようとしたのよ」
「何？！」
「記録からは抹消されているわ。だってまさか何百年も王家に使えてきたグリフィス家が国家反逆罪だなんて……公に出せる情報ではなかったのよ」
「では、あの少女は追放されたグリフィス家の末裔だというのか」
「ええ。10中8、9そうだと思うわ。」

「何ということだ・・・」
グリフィス家がグリモワール王家に楯突くなど、ありえない事態だ。王都の、特に位の高い貴族たちの間だけで秘密裏に処理されたのだろう。
もしかすると、公爵の地位にある自分の父はそれを知っていたかもしれない。
「先ほどゼデキヤ王にすべてを記した書簡を託したわ。あとは王の判断に委ねましょう」
「そうだな」
ゼデキヤ王は聡明でかつ人情味溢れる王だ。状況を把握して、最もよい判断を下してくれるだろう。もちろん、ねえさんの希望を最大限取り入れた判断を。
もう一度青白い顔の少女を見た。
柔らかそうな黒髪が頬にかかっていた。長い睫が影を落として、まるで作られた人形のように美しかった。
「俺は一度王都に戻る」
「明日まで休んでいきなさい。今日はもう遅いわ」
「……分かった」
これ以上少女の傍にいると、さらに心を囚われて本当に後戻りできなくなりそうだ。
「アレイ、あなたまだ何か言いたそうよ？」
「いや、何でもない」
「そう？」
ねえさんはいつもの猫の瞳に戻ってにこりと笑った。
「ちなみにラックに手を出したら昔みたいに拳固じゃすまないわよ？」
「！」
心臓が跳ね上がった。
「あんまりこの子の寝顔ばっかり見てるんじゃないわよ。この変態！」

「なっ……！」
「気づかないとでも思ったの？もう何年あなたを見ていると思ってるのよ。」
ねえさんは腰に手を当てて眉を寄せた。
「まあでもあなたなら任せてもいいかもね」
「は？」
「そろそろこの子は新しい世界を知らなくちゃいけないわ。そうね、まあ、あなたなら……」
「何の話だ」
「調子に乗らないでね。まだ早いんだから！」
「？？」
全く意味が分からない。
「ほんとにあなたは相変わらず変なところで鈍いんだから……私が心配するまでもなさそうね」
ねえさんはふうとため息をつくと、手をひらひら振って自分を部屋から追い出した。

SECT．5　王ノ勅命

次の日、馬を一頭借りて王都を目指した。
王都までは早足で3日、馬車でのんびりいくと5日はかかる距離にある。
急ぐ必要はなかったのだが、なんとなく少女のいる街から離れて頭を冷やしたくてちょうど3日で王都に到着した。
王都ユダ・イスコキュートスは王の住むジュデッカ城を中心にした同心円の都市だ。一層目は貴族の住むプルガトリオ外郭が囲む敷地、二層目は一般市民が住む城下町だ。最外郭をインフェルノ外郭が取り巻いている。

今回は半年振りの帰郷だった。
迎えは期待していなかったが、王都ユダと外を隔離するインフェルノ・ゲートで家の者が待っていた。
「お帰りなさいませ、ぼっちゃま」
「もうその呼び方はよせ、クリス」
執事兼自分の世話係を勤めるクリストファー＝マーロウ。今年60歳になる老父だが、背筋はしゃんとしていて口元のひげが白いのを除けばとてもそうは見えない有能な執事だ。
「ゼデキヤ王からジュデッカ城への参礼を言付かっております」
「わかった。すぐ行く」

久しぶりの実家だった。
父親は王家に仕えるクロウリー公爵、母は先代ヨヤキン王の叔母にあたる。建国以来ずっと繁栄を支えてきた名実共にグリモワール王家の重臣である。
ちなみに上官であるのねえさん――メフィア＝R＝ファウストは、伯爵の位とレメゲトンの地位を持つ自分たちのリーダーだ。それも、

彼女の母はゼデキヤ王の妹に当たる。少なからず血縁のある相手、それも共にグリモワール王国の重臣の家系ということで幼い頃から顔を合わせる機会も多く、特に自分もレメゲトンになってからはかなり深い付き合いになっている。

自分はもともと15歳のときに騎士の地位はもらっている。所属する炎妖玉（ガーネット）騎士団では5年で部隊長まで上り詰めた。

その生活はコインを継承した時に一変した。

20歳の誕生日にマルコシアスのコインを父から受け継いだのだった。

3ヶ月かかってマルコシアスと契約を結んだ。それはクロウリー家始まって以来の長期戦だったらしい。

父も母も自分を諦め見限っていたが、それは予想できない事ではなかった。もともと自分にあまり興味のない両親だ。最初から愛想もよく母に似た美貌を受け継いだ姉だけが彼らの興味を惹くところなのだから……学問に限りをつけ騎士という身分を求めた自分にその干渉が及ぶことはまずない。

それが終わったと思ったらすぐに王の勅命を受けてロストコインの回収にグリモワール王国中を駆け回った。忙しい合間に王都へ戻り、第43番目の悪魔サブノックとも契約した。二回目はそうかからなかった。わずか3日ほどで戻った自分を迎える者はいなかったが、その結果にゼデキヤ王からは栄誉を与えられ、父や母は珍しく手放しで喜んだ。

家の者と顔を合わせたくないわけではない。だが、実の家族よりねえさんや同じレメゲトンのくそじじぃのほうがよっぽど身近なのは確かだった。

実家に戻ってすぐ正装に身を包むと、王の待つジュデッカ城に向かった。

何度来てもこの大きな城には慣れることができない。床のやけに柔らかい絨毯も高すぎる天井もどうにも落ち着かない。

常にゼデキヤ王が公務をこなしている東の角部屋にまっすぐ向かった。
普段謁見の間は使われていない。堅苦しいことを好まないゼデキヤ王が、無駄に長い挨拶や通過儀礼のような儀式を省くために廃止した。
今では多くの場合が公務――主に書類整理だが――を行う小さな部屋で謁見が行われる。
もっともその部屋の警護は堅固なものだが。
「アレイスター＝クロウリー、参りました」
「うむ。早かったな」
書類の山の隙間からゼデキヤ王がひょこりと顔を出した。
自分の父と同じくらいの年齢だが、どうもこの王には茶目っ気というものが備わっているようだ。
「ファウスト女伯爵の書簡を拝謁した。……グラシャ・ラボラスのコインが見つかったのだな？」
「はい。この目で確認しました」
「そうか」
ゼデキヤ王は少しの間だけ眉を寄せた。
「ファウスト女伯爵の願いもあるのだが、そのグリフィス家の末裔と思われる少女をレメゲトンに任命しようと思うのだ」
「レメゲトンに……ですか？」
それはあのねえさんが最も望まないことになるのでは。
その空気を察したのか、ゼデキヤ王は軽く笑った。
「そんな怖い顔をするな、クロウリー伯爵。むろんファウスト女公爵も共に王都に戻ってもらう」
「それは……」
「クロウリー伯爵、そなたもアリギエリ女爵もメイザース侯爵もすぐに戻ってもらおうと思っている」
「？」
いぶかしげな表情を浮かべると、国王は真剣な顔つきに戻った。

「戦が……始まるやも知れんのだ」
「！」
思わず大きく目を見開いた。
隣国セフィロトとの関係はそれほど悪化していたのか！
通りでセフィロト王国の天文学者であるセフィラが国内に姿を見せるはずだ。
「セフィラが現れたことも聞いておる。まだセフィロトから直接的な動きはないが、事態は一刻を争うようだ」
「御意」
深く礼をして賛同の意を示す。
「ファウスト女伯爵の見解からすると、6人目のレメゲトンはかなりの力を持つらしい。グラシャ・ラボラスの力を使わずともかなりの戦力となろう。未だ持ち主のつかぬコインはまだ残っている」
その台詞でどきりとした。
あの少女がレメゲトンになるということは契約の儀式を通過せねばならないということだ。命が危険にさらされるあの儀式に……
「グリフィスの末裔は未だ少女です。今はセフィラから受けた傷が元で床に伏しております」
「無論すぐにとは言わぬ。だが、なるべく早く戻ってきて欲しい。その意をファウスト女伯爵に」
「はっ！」
短く返事をして部屋を後にした。
基本的にレメゲトンへの指令は口頭だ。それだけ王が信頼していると共に、密命もかなり多いということだ。
もう一度あの街に戻らねばならない。あの少女に会わねばならない。
嬉しいと同時にひどく怖かった。

SECT．6　真実ノ少女

王都に来るときよりずっとのんびりした速度で街に向かっていた。
どう考えても一日二日で完治するような怪我ではない。ゆっくり向かってもさほど支障はないだろう。
明日には街に着くという晩、夜遅く宿屋に入った。
「一晩泊めてもらえるか？」
「はい、お一人様ですね」
宿の番をしていたのは、若い娘だった。
おそらくグリフィス家末裔の少女と同じくらいの年だろう、きりりとつり上がった眉と温和そうな大きな眼が妖艶な、そこそこの美女だった。
やたらとちらちら自分のほうを見ているのが分かる。
「こちらの部屋です」
部屋まで案内し、妖艶に唇の端で微笑んだ。
「ありがとう」
短く礼を言うと、少女はほう、とため息をついた。
「お兄さん、すごくお綺麗ですね。声も素敵」
「……」
その台詞に困惑した。
いったいこの女は何を言いたいのだろう？
「もしよかったら少しお話しませんか？」
ああ、その手の誘いはいらない。
返事もせずに部屋の扉を閉めた。
自分が人並み以上の容姿をしていることは自覚している。だからといってどうということはないが、面倒といえば面倒だ。
ねえさんもかなり見目麗しい部類に入るだろうが、彼女の場合はそれを楽しむだけのバイタリティも心の余裕も有している。

どさりと荷物を置いて、ベッドに横たわった。
天井を見上げながらふとあの少女のことを思い出す。
自分は、この先あの少女に契約という難関が待っていることに気づいてようやく自分の上官の感情を理解した。
彼女はあの少女を大切に大切に育ててきたのだ。
過去何人ものレメゲトンが契約の際帰ってこなかったり、命を落としたりしている。百年前までその成功率は二割に満たなかったらしい。
マルコシアスとの契約を思い出す。今でこそかなり親しくはなったが、契約で初めて目にした時の恐怖と畏怖はとても忘れられるものではない。契約のためにいったいどれだけ向こうにいたのか分からない。くそじじぃが気づいた時には血まみれで魔方陣の中に転がっていたらしい。自分自身も最後の方はいったい何が起きたのか、どうやってマルコシアスが契約を承諾したのか全く覚えていなかった。
漆黒の瞳を持つあの少女はいったいどの悪魔と契約を結ぶのだろう。無事に帰ってくるといいのだが。
考えても仕方がない。
おとなしく眠ろうとしたが、希望の光に満ち溢れた漆黒の瞳が頭から離れてくれなかった。

ねえさんがあの少女にどんな風に説明したのかは分からないが、自分が到着した次の日には王都に発つことが決まっていた。
王都まで行く馬車を用意し、ねえさんの店の前で待っていると、少女の声が聞こえた。
馬車の階段を上る音がして、入り口が開いた。
その口から発せられた言葉は、予想していたものと少々違っていた。
「あ……えーと、誰？」

かわいらしく小首をかしげて大きな漆黒の瞳をきょんと丸くした。
その後ろからねえさんが入ってきて苦笑する。
「忘れてたわ。私の知人のアレイスター＝W＝クロウリー。今回王都まで一緒に行くのよ」
少女はだいぶ健康を取り戻したようだった。頬には淡く桃がさして、黒髪は肩の辺りで揺れている。ぱっちりとした黒瞳が目を惹く、利発そうな顔立ちだった。
「はじめまして、クロウリーさん。おれはラックといいます。よろしく」
おれ、という一人称に驚いた。が、それは表面に出さない。
それより何よりあの糸の切れた人形のように動かなかった少女が動いているという事実が新鮮だった。
「……よろしく」
かなりそっけない言い方になったのは仕方ないだろう。
向かい合わせの席は広いのに、なぜか少女は自分の隣に腰掛けた。
いったい何を考えているんだ？
「さて、何から話そうかしら……説明は手伝ってくれるのよね、アレイ？」
「ん、まあ、それなりに」
少女の顔をまともに見ることはできなかった。
しかしながら、少女の印象はそこから激変していった。

ねえさんは向かい合わせに座った少女に諭すような口調で話し始めた。
「それじゃラック、今まであなたに教えていなかったこの国のこと、グリモワール王国のことから少しずつ話していくわ」
「グリモワール王国？」
きょとん、とした声を出した少女はまるで何も知らない子供のようだった。
「そうよ。あなたや私が今住んでいるこの土地を治めているのは、

ゲーティア＝ゼデキヤ＝グリモワール様。グリモワール王国第２２代ゼデキヤ王という方なの」
「ゼデキヤ王」
「そう。私たちが住んでいたカトランジェの街や、隣のジャスパグ、今向かっている王都ユダ・イスコキュートスもそうよ。みんなゼデキヤ王が支配してらっしゃるの」
「王都ユダ・イスコキュートス」
なぜいちいち口に出すのか。
オウムじゃないんだ、静かに聴いていろ。
「ユダというのはグリモワール初代国王の名前よ。ユダ＝ダビデ＝グリモワール。でも、ダビデ王と呼ばれることのほうが多いわね」
「ユダ＝ダビデ＝グリモワール」
少女はまるで無理難題を押し付けられたかのように眉を寄せた。
ちょっと待て。何かおかしい。この反応はとても２０歳近い娘のする反応ではない。
とても素直なよい子なのよ、というねえさんの言葉が頭の中で反芻された。
「覚えなくても大丈夫よ、ラック」
「ほんと？」
「できれば、今の王様の名前だけ覚えておきなさい」
「えーと、ゼデキヤ王。ナントカゼデキヤ＝グリモワール」
ああ、やっぱりそうか。
今の台詞で確信した。
「まあ、それで十分だわ。それ以外はなんとなく覚えていればいいわよ。これからどんどん難しい話をするから」
「わかった」
あまりにも阿呆面で笑ったために、思わず本音が出てしまった。
「何だ、こいつただの阿呆か」
その瞬間ねえさんが頭を抑えた。こうなることはいくらか予想していたようだ。

「むっ！　なんだよう」
これまでいろんなことを心配していた自分が馬鹿らしく思えた。
何でこんな頭のねじが抜けたやつのことなどずっと考えていたんだろう？
容姿を愛でるだけの人形のようだった少女が動き始めた途端、自分の中での少女の位置が完全に変わってしまった。
――そうか。
自分は美しい花を愛でるように、壮大な景色に感動するようにこの少女の容姿に惹かれていただけだったんだ。心配して損をしてしまった。
自分の中でそう結論付けると、はあ、と床に向かってため息をつく。一気に気が抜けた。
「事実を言ったまでだ」
こうなればもうとどめるものは何もない。
この少女は人形ではないのだから。
「アレイ、やめなさい。ラックも落ち着いて」
「だって、ねえちゃん！」
「年は知らんが、どう見ても２０近いだろう。精神年齢はいったいいくつだ？頭の年齢も調べたほうがいいぞ。信じられんくらいに役に立たん頭だろうな」
そう言うと少女は眉を寄せた。
「おれが阿呆なんて、そんなこと自分だって分かってるさ！」
「そうか、分かってるか。分かっててそれじゃあお前はもう救いようのない馬鹿だな」
「何だと！」
眉間にしわを寄せて、唇を尖らせてその少女が睨んでいるのがわかったが、それを無視して視線を窓の外に向けた。
いったい何なんだ。容姿と中身が違いすぎる。まるで子供だ。
黙って座っていればよっぽど美しい娘だというのに・・・
「もうやめなさい、アレイ……ラック、続きを話すわよ？」

「うん、いいよ」
少女はぶすくれた様子でしぶしぶ退いた。
その様子を見て困ったように笑いながらねえさんは話を続けた。
「今わたしたちが向かっているのは王都ユダ・イスコキュートス。王都ユダと呼ばれることのほうが多いわ。さっきも言ったけれど馬車で5日はかかるの」
「遠いね」
「そうよ、遠いの。一度行ってしまったらきっと、もうあの街に戻れないわ」
ねえさんの台詞で少女は素っ頓狂な声を出した。
「えっ?!　どういうこと?!」
まるで何も聞いていないかのような口調だが、ねえさんは連れてくる時に何も話さなかったのだろうか。
いや、何も話せなかったのかもしれない。
3年間も大切に育ててきた、それこそ純真無垢な心を持った少女の前で故郷を捨てろなどということはとても口に出せなかったのだろう。
それでもねえさんは決心したようにゆっくりと言葉を紡いだ。
「一度王都に行ってしまえば、私は情報屋をやめて、元の職に戻ることになるわ。そうしたらもうあの街には戻らない」
「情報屋やめるの?　そしたらおれはどうしたらいいんだ?」
困惑した少女はまるで迷子になった子供のように見えた。
「あなたも王都で新しい地位と身分をもらうことになるでしょう。いいえ、新しい、というよりはあなたが一記憶をなくす前にいた場所に戻るの。」

SECT．7　ヒトツダケ

「うそだ！」
がたん、と少女が馬車の中で立ち上がった。
がたがたと馬車が揺れる音だけが響いている。どうもこの音は耳に馴染まない。
「もう街に戻らないの？　マスターにも会えないの？　ちびマスターも？　もう街を探索しなくてもいいの……？」
「そうよ」
「そんなの」
そこまで言って少女は口をつぐんだ。
ひどく困惑している様子だ。唇を一文字に引き結んでこぶしを固めている。よほどあの街に思い入れがあるのだろうか。
「ラック、何かを手に入れるとき人は代わりに何かを失うのよ」
ねえさんの瞳が帝王の光を灯した。
小さな子供に言い聞かせるようにゆっくり、はっきりと告げる。
「もし戻りたいというのなら、まだ戻れるわ……あなた一人、あの街で生き抜いていくと決心して、実際生きていくことが出来るのなら」
「ねえちゃんは？」
「もしあなたが戻ると言っても、私は王都に行くわ。それはもう覆せないことよ」
「っ！」
その瞬間少女の顔が泣きそうに歪んだ。
おそらくこれまで3年間、街以外の生活を知らずに育ったのだろう。新しい世界に飛び込むのは少なからず恐怖を生むものだ。
わなわなと震える唇を下から見上げながら、阿呆相手とはいえ心ならずも胸が痛んだ。
この幼い少女――見た目はかなり成熟していたとしても少なくと

も中身は――の心の中を占める絶望は想像を絶するものだろう。これまでの生活をすべて捨てて、何も知らない土地へ行くのだ。
だが、たとえどんな説明だったにせよ、ねえさんが嘘をつくことはない。故郷を捨てることが予想できなかったはずはないのだ。
きっと少女もそれが分かって言葉を飲み込んだのだろう。
「甘いな、お前。頭の中身も考え方もガキだ」
「うるさいっ！」
震えるような声で一喝された。
そのまま椅子に座り込んでじっとうつむいている。ふるふると震えるひざの上の右手を見つめて黙り込んでいた。
確かに今まではねえさんに守られて毎日単調な生活を送っていて幸せだったかもしれない。
だがきっと今がこの少女にとってステップアップする機会だ。
「これも嫌、あれも嫌なんて言っててどうするつもりだ？お前が望むように進む世界なんて、そんなものどこにも存在しないんだよ」
「……」
「ほしいもの全部手に入れられると思うなよ。無理に決まっているのだからな。だから、求めるものをひとつに絞れ。お前が一番大切だと思うものを選べ。いったい今何を求めるのか、それをさっさと決めてしまえ」
がたがたと馬車の音が響いている。
「決めたらもう迷うな。一番大切なものだけを命がけで追い求めろ」
そう、４年前自分がレメゲトンになることを決めた瞬間のように。
自分が一番大切だと思うものを選ばなくてはいけない。
「お前が、望むことは何だ？」
とても難しい問いのはずだ。
少女はじっと黙り込んだ。
ねえさんが信じられないものを見るような目を向けていた。アレイにもお説教ができたのね、という声が聞こえてきそうだ。
そんなことはどうでもいい。

少女の出す答えに興味があった。
すぐには出せないかもしれない。だが、生きていくには大切なものを『ひとつ』にすることが要求される。少なくとも自分は今までそうやって生きてきた。
じっと床に視線を落とすと長い睫が頬に影を落とす。耐えるように引き結ばれた桃色の唇も、少し上気して色づいた頬も人の視線を集めるには十分だろう。
なお少女の横顔に魅入っていた自分に驚く。
何か悔しくて視線を戻すと、楽しそうに微笑むねえさんと目が合った。
くそっ。
頬が引きつったかもしれない。
ねえさんに文句を言おうかと思った瞬間、少女が顔を上げた。
「おれは……ねえちゃんと一緒にいたい」
まっすぐにねえさんの金の瞳を見つめた眼差しは驚くほど美しく澄んでいて――思わず息を呑んだ。
「3年前に拾われてから、名前をくれたのも、育ててくれたのも全部ねえちゃんだ。おれの世界はねえちゃんが創ってくれたんだ」
少女は微笑んだ。
最初に街で見かけたときと全く変わらない微笑だった。
「街にいたかったのはねえちゃんとの生活がしたかったからだ。過去が知りたいと思ったのは、知らずにいていつか過去が分った時にねえちゃんと裂かれるのが嫌だと思ったからだ。おれの世界は全部ねえちゃんと一緒にあるんだ」
その言葉で理解した……そうか、少女の世界はすべてこのねえさんと共にあったんだ。
「だから、おれはねえちゃんと行く。もしその行き先が過去なら過去を求める。王都に行くならついていく。街にもう戻らないっていうんなら、おれももう戻らない！」
「ラック……」

ねえさんは感動したようにつぶやいた。
この短時間で自分なりの答えにたどり着いたことだけは評価してやってもいい。
「やっぱりガキだな」
「ねえちゃん、おれ付いて行くよ。ねえちゃんが行くんなら地獄の果てにだって行く。おれの世界はそこにしかない」
少女はふいに自分のほうを向いた。
「ありがとう、アレイさん！」
まるで世界の暗闇をすべて打ち払うかのような笑顔。
不意打ちをくらって心臓が跳ね上がった。

天真爛漫で自分の欲望に忠実なように見えてその実、自分以外を大切にしすぎるわ。傍から見ていて胸が痛むほどにね。でも――怖いの。いつかそんなことをしていたらこの子が壊れやしないかって。
いつだったかねえさんが言った台詞が頭の中を駆け抜けた。
まぶたに焼きついた笑顔の理由はきっとそこにある。
あの笑顔はきっと人を大切に大切に思って、世界中の人の幸せを願っている者だけが持っている笑顔だ。きっと、自分が今まで知らなかった暖かさをあの少女は持っている。

その答えを突き詰めていけば、自分が少女に惹かれた理由が容姿だけではないことに気づいたはずなのに、その時は頭の中が混乱していて気がつかなかった。

これまで自分が一番大切にしていたものが他のものに取って代わられるなんて想像したこともなかった。
それでも何を失っても守ると誓ってしまう日がいつかきてしまう事を、微かにでも予感できたかもしれなかったのに――

SECT．8　苛立チノ行方

夜の帳が下りてきて、今日の行程はここまでだ。
それなりに上質の宿に入ると、一人一部屋ずつとってそれぞれ分かれて入った。
「ふう……」
馬車に乗っているだけでもそれなりに疲労がたまるらしい。
ソファに座ってくつろいでいると、ドアをノックする音がした。
「ねえさんか？」
「違うよ」
なぜか入ってきたのはあの少女だった。
「何の用だ？」
「ねえ、アレイさん。アレイさんも『一番大切なもの』を選んだの？」
「失礼な上に唐突な質問だな。頭の足りていないお前らしい」
「いいじゃん」
唇を尖らせた少女は宿に用意されていた寝巻きにすでに着替えていた。
昼間していた少年のような格好よりもネグリジェのようなタイプのこちらの服の方が似合っていると思う。
いや、そんなことはどうでもいい。
少女はたたっと近寄ってきてソファの隣に座った。
いまだ全く動かない左手が触れた。
「いったいそれを聞いてどうしようというんだ」
「……だっておれ、すごく辛かったから」
言葉を選ぶのに手間取っているように、少女はゆっくりと言葉を紡いだ。
「ねえちゃんがいればいいって言ったけど、本当はもっと他にも大切なものあったよ。あの街にはおれの好きなものがたくさんあった。

カフェのマスターにも鍛冶屋のゼルにも本屋のユグばあさんにももう簡単には会えないんだって分かったらすごく悲しかったよ？」
漆黒の瞳は微かな悲しみを含みながらまっすぐにこちらに差した。
「アレイさんも悲しかった？　『一つだけ』を決めて、他にもたくさんある大切なものを幾つも失くす時、辛かった……？」
「いや、大丈夫だった」
それは嘘だ。
大切なものを切り捨てる時は必ず痛みを伴うものだ。
「そうなの……？」
「ああ」
騎士という道を捨てたときに感じる痛みは今でも心のどこかで膿んだ傷のように重い。
それでもその事は口に出せなかった。この少女に少しでも不安な要素を与えたくなかった。
気を遣う必要がどこにあるかと聞かれると難しい。だが、昼間の落ち込む様子を見た後だったためにこの少女に悲しむ顔はさせたくないと心のどこかで思ってしまったのだろう。
「それじゃ、どうしたらこんな風に悲しまずに済むの？」
心底その答えを求めているようだった。
不安げな瞳をこちらに向けて、何かを捜し求めるように見上げた。
「『ひとつ』に決めた大切なことをしっかり持て。それ以外に目もくれないように。そうすれば、おのずと痛みは引いてくるだろう」
「そうなの？」
「そうだ」
だが、それまでには時間がかかるだろう。きっとそれまでずっとこの少女は苦しみ続けるんだろうな。
それは自分が一番よく知っている。
「でも、分かってるんだよ。ねえちゃんと一緒にいることが一番大切で、それだけを守ろうと思ってるのに……どうしても、寂しいんだ」

「それはねえさんに言うといい。なぜ俺のところへ来た」
「やだよ、ねえちゃんを困らせて……嫌われたくないもん」
「まったく……このくそガキが」
「ガキって言うな！」
きゅっと眉を寄せた表情はあまり年相応ではないだろう。
本当にこの少女の世界はあのねえさん中心に回っているようだ。
「大丈夫だ、ねえさんはお前を嫌ったりしない」
それは確信を持って言えた。
あのねえさんもこの少女のためなら魂も売りかねない勢いだ。
「……ほんと？」
「当たり前だ。お前はいったいこれまでねえさんの何を見てきたんだ？」
口をぽかりとあけてじっと見上げてくる少女を見ていると一思いに額でも叩いてやりたくなってくるが、それはじっと我慢した。
その阿呆面をやめろ！
「そうかなあ……？」
「ああ、そうだ」
本当にもういらいらする。
いったいこの苛立ちが何なのか、分らない事そのものがさらに苛立ちを募らせる。
「うん、そうだよね」
ぱっと明るい表情をして、少女は立ち上がった。
「ありがとう！　アレイさん」
「……ああ」
それ以外答えようもなくて、そっけない返事を返した。
少女が部屋を出て行った後も正体不明の苛立ちが心のどこかにわだかまっていて、眠れそうになかった。
胸の端を焦がすようなそれは燻り、消えそうにない。

SECT．9　苛立チノ正体

次の日もその次の日も、ねえさんはずっと少女に様々な話を聞かせていた――いや、もうガキと呼んでいいだろう。

グリモワール王国のこと。初代国王ユダ＝ダビデ＝グリモワールが召還した悪魔のこと。稀代の天文学者ゲーティア＝グリフィスの武勇伝。

レメゲトンの長であるねえさんの知識量は半端ではない。話が尽きることなど考えられず、ガキはひたすら昔話に興じていた。

今日は１０番目の悪魔ブエルの話から始まった。第１０番目の悪魔ブエルは治癒の力を持つ。そこから１００年前流行した疫病の話とそれを収めた当時のレメゲトン、ウェルギリウス＝アリギエリの勇姿へと話が進み、さらにはウェルギリウスの妻で第４番目の悪魔サミジーナを使役したミリアナ＝アリギエリの生い立ちにまで及んだ。

「ミリアナは天文学とは全く無縁の小さな村で、一般家庭に生まれたの。彼女は小さな村で優しい人たちに囲まれて幸せに暮らしていたわ。でも彼女が５歳になる頃に第１５代ヒゼキヤ王の命令で彼女の村近くの湖から水路をひくことになったの」

「何で？」

「当時グリモワール王国は農地を拡大するために王国全土で灌漑工事を行っていて、その工事の一つがミリアナの村の近くで行われたのよ。そしてその水路は彼女の家をちょうど通るコースに作られることになっていた」

「えっ！　ひどいよ！」

「いいえ、よくあることよ。ちゃんと王国から資金が出て、違う場所に家を構えることになるはずだったわ。でも……」

「でも？」

「引越しを行う前に、工事に参加していた彼女の両親が事故でなく

なったの」
「えっ！」
「ミリアナは家を失い、両親も失ってしまった。その灌漑工事の責任者をしていた若きアリギエリ侯爵は５歳のミリアナを不憫に思い使用人の娘として引き取ったの」
「あれ、アリギエリって後で結婚するヒトだよね？」
「そうよ」
ねえさんはにこりと笑った。
よくできたわ、えらいわと子供を褒める親の顔だった。
「最初は使用人に育てさせていたのだけれど、ある時侯爵はミリアナに天文学者の才能があることに気づいてヒゼキヤ王に申告したらしいわ。当時サミジーナのコインを所有していたアルマデル家は衰退していて次代のコイン所有者がいない状態だったらしく、１２歳になるミリアナは異例の若さでレメゲトンの地位を戴いたわ。そして、アリギエリ侯爵はミリアナを引き取って自分の養女にしたの」
「えっ、んじゃあアリギエリさんは娘と結婚したってこと？」
「ええ、そうなるわね」
ねえさんは苦笑した。
有名な話だ。その後いくつも侯爵家のしがらみや嫉妬、親類の反対など、どろどろとした事情が挟まっている。が、ねえさんはその話をさすがに省くようだ。
「すごいね！　だってすごーく歳が離れてるんじゃない？」
「そうよ。結婚した当時、ミリアナは１８歳、侯爵は３７歳だったわ」
「５歳で拾ったんだから……侯爵はそのとき２４歳？」
「そうね。もう結婚していてもおかしくはない年だったのだけれどずっと独り身だったわ。もしかすると、ミリアナが美しく成長するのを待っていたのかもしれないとも言われているの」
「そうかあ。それで夫婦でレメゲトンだったんだね」
「今でも、第１０番目の悪魔ブエルのコインと第４番目の悪魔サミ

ジーナのコインをどちらもアリギエリ家が所有しているのはそのためだ」
　ついでに情報を足してやると、ガキは嬉しそうにこちらを見た。
「それじゃ、今でもレメゲトンにはアリギエリさんの子孫がいるの？」
「ああ。ベアトリーチェ＝アリギエリ女爵。王族の専属医師も勤めている」
「お医者さんなんだ」
「そうだ。俺が騎士の位を、ねえさんが書記官の位を持つようにアリギエリ女爵は医師の資格を持っている」
「え、アレイさん、騎士なの？」
「……それがどうした」
「かっこいい！」
　ガキは目をいっぱいに見開いた。
　いったい騎士であるからどうだというんだ。
「そうよ、アレイは王国最強の炎妖玉（ガーネット）騎士団に所属しているのよ」
「すげえ！　やっぱ強いんだ！」
　目をキラキラさせて近寄るガキから逃れようとしたが、このガキはあろう事か自分の左腕をがっしと掴んだ。
　驚愕に思わず身をひいたが、ガキはますます顔を近づける。
「ね、ね、炎妖玉（ガーネット）騎士団の団長さんて、どんなヒト？　強い？　どんな剣を使うの？　アレイさんは？」
「こら、ラック。アレイが困ってるわよ？　……あ、ごめんなさい、喜んでるのかしら？」
「誰が喜ぶか！」
　ねえさんに言われてガキはやっと手を離した。
　すかさず座る場所をずらして距離をとる。
「あ、ひどいやアレイさん！　今おれから逃げたでしょ！」
「当たり前だ、ガキがうるさいからな」
「おれは聞きたいことを聞いただけだよ。」

「それがうるさいと言っているんだ」
「んじゃ何を言ったらいいんだよ」
「黙っていろ」
「そんなの無理だよ！　退屈すぎる！」
本気で困った顔をするガキにはもう付き合っていられない。
窓の外の景色に視線を移した。
「あっ、ひどい！　無視した！」
「もう、やめなさい、ラック。アレイもいい大人なんだからラックで遊ぶのはやめなさい。素直じゃないんだから」
答えられず顔が引きつった。
どうやらねえさんの中で、俺はこのガキをとても大切に思うようになっているようだ。が、それは断じて違う。
確かに見た目はかなり惹かれるものがあるが、それは万人に共通だろう。
とてもじゃないがこのガキのおしゃべりとよく分からないオーバーリアクションにはついていけそうもない。しかも鳥頭の阿呆だ。
しかしながら、ガキがねえさんと話すたび、二人が楽しげに笑う度になぜか心のどこかで苛立ちが募っていく。
本当にいったいこの苛立ちは何だというんだ。
分からない。
分からない事がさらに苛立ちを加速させる。

SECT．10　悪魔ト歴史ノ中デ

すでに馬車で４日目。明日には王都に着くというが、周りの景色はこの３日間ほとんど変化がない。この落ち着きのないガキの全身はすでに退屈の虫に支配されてしまったようだ。

今日のねえさんの話はどうやら暗黒の３３日間についてらしい。

３２番目の悪魔アスモデウスは、当時使役していた天文学者ハワード＝フィリップスの手を離れて暴走した。もともと悪魔は人間に従順に従っているわけではない。隙を見せれば簡単に人間を裏切って、自身の欲望に忠実になる。

常日頃人間に使役されるのをよく思っていなかったアスモデウスはハワード＝フィリップスの体を乗っ取って王都に進出、ジュデッカ城に単身攻め入って城を守る衛兵や王都に在住していた輝光石（ダイアモンド）騎士団、漆黒星（ブラックルビー）騎士団に甚大な被害をもたらした。

それだけでは済まず、城内の天文学者を残らず蹴散らしてからソロモン王の玉座を乗っ取ってしまったのだ。王国には全部で１２の騎士団があったが、輝光石（ダイアモンド）騎士団、漆黒星（ブラックルビー）騎士団はその中でも３本の指に入るほどの屈強の騎士団だったために他の騎士団は王都奪回をしり込みしていた。

悪魔が国を乗っ取った。それを隣国はグリモワール王国に攻め入る好機と見た。

グリモワール王国始まって最初の危機だった。

だが、アスモデウスの天下は長く続かなかった。

偏狭の地まで治安の制定に出かけていたレティシア＝クロウリーは玉座乗っ取りの知らせを受け１ヶ月後王都に帰還した。そして、３５番目の悪魔マルコシアスと王国最強の炎妖玉（ガーネット）騎士団を率いて、わずか３日でアスモデウスを打ち倒しジュデッカ城を取り返したのだった。

暴走したアスモデウスは鉄の枷をかけられ、2代目国王ワイズ＝ソロモン＝グリモワール本人によって使役されることとなった。

「この出来事を『暗黒の３３日間』と呼ぶの」
「へえー。すごいんだ！でも、マルコシアスのコインはまだ見つかっていないの？」
「いいえ、マルコシアスはずっとグリモワール王家に仕えてきたわ」
「やっぱり、裏切ったり逃げたりしないんだね」
「そうよ」
ねえさんはそこで自分に目線を向けた。
まあ、大体予想はしていたことだ。
「見せてあげて、アレイ」
「えっ、アレイさんが持ってるの？」
「コインは基本的に親から子へ継承されるの。アレイのフルネームはアレイスター＝W＝クロウリー。彼はレティシア＝クロウリーの子孫よ」
どうしようか少し迷ったが、とりあえず左手をマントの外に出した。
その左手首には銀色のチェーンが巻かれていて、トップにコインが2個提げてある。
「うわあ……」
ガキは大きく目を見開いてコインを観察した。
くすんだ金色のコインにはどちらにもやはり似たような幾何学模様が描かれている。
「もうひとつのコインはどんな悪魔なんだ？」
それを聞かれるのも予想の範囲内だ。
「第４３番目の悪魔、サブノック。ライオンの頭部を象った兜をかぶり、くすんだ青のマントを身に着けている。時に青い毛並みの馬に乗っていることもある。こいつも強い……加勢はしてはくれないが。サブノックの剣で切られると傷口が腐って蛆が湧くといわれて

いる」
「うわぁ！」
ガキは眉を寄せた。
だが、とりあえず一通り説明しないと満足しないことはここ3日間で嫌というほど学習した。そうしないとすぐに『なぜ』『どうして』攻撃が始まってしまうからだ。
「だが、それよりももっと重要な能力はこいつの武器製造能力だ」
「武器製造？」
「そうだ。個人に合った武器を一晩で作成してくれる。マルコシアスに比べてサブノックは扱いづらい。めったなことではサブノックは呼び出さん」
「へえー」
ガキが満足そうな声を出したので、コインをマントの中にしまう。
レメゲトンが二人がかりで知識を伝達しているこの3日間で、このガキはいったいどれほどの情報に触れただろう。そしてそれをどれほど吸収したのだろう？
「マルコシアスとサブノックを使役するアレイは戦闘に特化した天文学者よ。グリモワール王家に仕えているうちで唯一、戦場に出て行く天文学者なのよ」
「そうなんだ。アレイさんは強いんだね」
このガキは、本当に唐突に人を褒めたり素直な感想を言ったりする。
普段は好きなことばっかり言ってうるさいのに。何度口を塞いでやろうかと思ったか知れない。
いや、褒めるときだって心の底からそう思っているのだということは分かる。そんなこと十分すぎるくらいわかっている。
誰よりも正直でまっすぐで純粋な子供のような心を持っていることなど知っている。
だが……
「お前に褒められても褒められた気がしないな」

「何でだよ。正直に言ったのに」
なぜ口を開くとうまくいかないのだろうか。これは非常に不思議なことだ。
「第一、俺が戦闘に特化しているように、５人の天文学者はそれぞれ能力に特色がある。俺だけが特殊なわけじゃない」
「そうなのか？」
「そうだ」
こんな風に知識を伝達してやると、真剣な表情で聞いて納得し、時に信じられないほど鋭い質問を返してくる。
それが楽しいといえば楽しく、もっと多くのことを教えてやろうという気になってしまうのも事実だった。おそらくねえさんも同じことを感じているはずだ。
「例えば５人の中で唯一王都に残留したくそじじぃは占星術の悪魔オリアクスと老賢者フルカスに加えて、それぞれ未来と過去を見るヴィネーとオロハスを使役している。主に情報戦担当の天文学者だ」
「持ってるコインの数はヒトによって違うんだね」
「そうだ。くそじじぃが４個、俺は２個、あと３個持ってるやつが２人、それからここにいるねえさんが５人の中で最高の５個。あとは、この３年間で集まったコインが５つある。それは国王が所持していて、所有者になる天文学者を探している」
そこでねえさんが軽くため息をつきながら諌めてくる。
「アレイ、そんな風に呼んじゃだめじゃない」
「くそじじぃはくそじじぃだろ」
ねえさんは困ったように苦笑してガキの頭をなで、ガキは嬉しそうに笑ってねえさんの顔を見上げている。
その様子を見ているとどこにも入り込む隙がない気がしてくる。
「あなたのコインを合わせて今王国が所有するコインは２３個。残り４９個のうちのいくつかは国外へ流出してしまったものもあるわ」
「ねえちゃんたちはそのコインを探してるんだね。それがねえちゃんの本当の仕事なんだ」

「そうよ。きっと全部のコインを集めるには何十年もかかるわ」
「大変だあ」
「ラック、これからはきっとあなたにもその仕事を手伝ってもらうことになると思うの」
「うん、もちろん！」
ガキがまた阿呆面で笑った瞬間だった。
ガクン！
急に馬車が停車した。

SECT．11　忌ムベキ者ハ

「何？」
ねえさんがこんこん、と御者の窓を叩く。
返事はない。
視線で意思を疎通させ、立ち上がった。
おそらく……危険だ。
「ここで待ってろ」
ガキにそう言いつけて馬車を出る。
ねえさんもすぐに続いた。
馬車の外で待ち構えていたのは。
「読みはあたりだったな、『光』」
「さすが『音』だねえ」
「やはり……」
銀髪のセフィラが二人。明るい陽の元で見ても区別はつかなかった。青みがかった銀髪に陶器のように白い肌、群青の瞳までまるでそっくりだ。
年は自分と同じが少し下くらいだろう。肌にぴったりとした黒い服を着ているところを見ると、隠密行動の最中だったはずだ。それがいったいなぜ白昼堂々襲ってきたのか。
御者は馬車の前に立ちはだかった二人に戸惑い、困惑している。
「排除する。そこを動くな」
「はいっ！」
おびえる御者にそうきつく言い放ってからマントの中からコインを突き出した。
「マルコシアス！」
同時に叫ぶ。
次の瞬間には体中が躍動するような感覚と共にマルコシアスの加護が全身にいきわたった感覚があった。

「ふむ　この間のセフィラか」
「そうです。今度こそ逃がさない」
腰に差していた長剣をすらりと抜いた。
セフィラ二人も手甲から銀のブレイドを飛び出させた。
「先に聞いておく。この間のガキ……女に印を付けたセフィラはお前たちだな？」
「貴様に言う必要はない！」
銀髪の片割れが吼える。
どうもこちらはもう一人に比べて血の気が多いらしい。
「貴様こそ邪魔しやがって、あのレメゲトンを出せ！」
「知らん。たとえ知っていてもお前に渡すものか」
「あのレメゲトンだけは……殺す！」
群青の瞳に炎が宿った。
なんだ、この妙な執着は。そのためには隠密行動もすべて捨てるというのか？
ねえさんの方も困惑しているようだ。このセフィラの意図が分からない。目的も任務内容も全く不明だ。
「邪魔するのなら貴様も同じだ」
「できるならな」
マルコシアスの加護を受けている今の自分にかなわないことはこの銀髪のセフィラも分かっているはずだ。
それでも戦闘を避ける意思はないようだ。
「仕方あるまい」
切っ先を銀髪のセフィラに向けた時、後ろの馬車から微かな物音がした。
振り向かなくても分かる。
仕方のないやつだ。
「中にいろと言っただろう」
もちろん聞くはずないことも分かっていたが。
自分の苛立ちをよそに、ガキは首を傾げた。

「……天使？」
それが自分の背後に浮かぶマルコシアスの姿に向けられたものだと分かるのに一瞬かかった。
「黄金獅子の末裔か　本当に生き残りがいたとは」
マルコシアスがまるで面白いものでも見つけたような口調で返す。
「アレイさんが持ってるコインの３５番目の悪魔さん？　えーと、マルコシアスさん」
「ほほう　我の名を知るのか　過去を持たぬ少女よ」
「さっきアレイさんが教えてくれたんだよ」
戦場には似つかわしくないほどの穏やかな会話がなされている。
目の前では銀のブレイドを閃かせた暗殺者が狙っているというのに！
「初めまして。よろしく、マルコシアスさん」
「ふふ　礼儀正しいな」
マルコシアスは楽しそうに笑っていた。
だが、そこでガキは銀髪のセフィラの存在に気づいてしまったようだ。
「銀髪のヒト……」
呆けたようにポツリとつぶやいた。熱に浮かされたようなその声ではっと気づく。
そう、このガキはあろうことかこいつらに会いたがっていたんだ。
「この間のレメゲトン！　貴様らやっぱりグルだったのか！」
真っ赤なオーラをほとばしらせて、銀髪のセフィラはガキを睨みつけた。
その視線に耐えるようにして、ガキは顔をしかめて左腕を押さえた。
とにかく接触させてはいけない。銀髪のセフィラとの間に立ちはだかった。殺させはしない。手を触れさせる事だって許さない。
「貴様……またしても邪魔をするのか、今度こそ叩き潰してやる！」
銀髪のセフィラの台詞でマルコシアスが嘲笑した。

「なお　我に戦いを挑むか」
左手で長剣を構えた。
マルコシアスの加護がある時、通常の何倍もの力を発揮することができる。銀髪のセフィラは相当な腕前だったが、自分の実力とならば拮抗しているくらいだろう。加護がある今負ける理由は何もない。
「がぎぃん！」
振り下ろされた銀のブレイドを真正面から受け止めた。
やはり先日の傷は感知していないらしい、セフィラの動きは若干鈍い。
「ラック、中に戻りなさい！」
ねえさんが叫んだのが聞こえた。
そんなことを聞くガキではないだろう。それより先にこのセフィラを潰すまでだ。
いったん距離を置いて間合いを取る。
「そこをどけ、レメゲトン！」
この銀髪のセフィラのどこからこれほどのエネルギーが発せられるのか。なぜこれほどこのガキに執着するのか。
そしてなぜこの太陽の高い今……天使を召還しないのか。
セフィラは隣国セフィロトの天文学者だ。自分たちが悪魔を使役するようにセフィラは天使を召還し、その加護を受ける。
夜、太陽が天にないうちは天使を召還することができない。悪魔は召還に昼夜関係ない。ただ、昼間のほうがいくらか力が落ちる程度だ。
召還することも考え付かないほどに頭に血が上っているのか。
息を潜めるようにするとセフィラの呼吸まで聞こえそうだ。
空気がぴんと張り詰めている。少しでも動くと崩壊しそうだ。
おそらく、最初の一撃が勝負。
「……」
額から汗が伝った。
頬を伝い、顎に大きな雫を作る。

目の前の敵から視線が外せない。
闘気で負ける気はないし、退く気も全くない――その気負いが裏目に出てしまった。
雫が顎を離れた。
ひどく長い一瞬。
ぽたり、と雫が地面に落ちた……
「ぎいいいん！」
すさまじい金属音と共に剣を持つ手に負荷がかかった。
そのまま力任せに押し返そうとすると、途端に力は方向を失ってバランスを崩す。
銀髪のセフィラは自分の剣をまともに受けずに受け流し、横になぎ払うようにしてまっすぐに自分の後ろにいるガキの方向へ切っ先を向けていた。
「しまった！」
「ラック！」
同時にねえさんと叫んだ。
相手の覇気につられて剛の剣で叩き潰そうとしたのが間違いだ。
完全に受け流されて避けられた挙句後ろにいるガキを危険にさらしてしまった。
ガキは大きく漆黒の瞳を開いて立ちすくんでいる。
間に合わない！
「死ね！」
「！」

SECT．12　死ナセヌト誓イテ

心臓をざくりと抉られるような恐怖が全身を貫いた。
このガキが、死ぬ……？
そんなこと……
「やれやれ　致し方あるまい」
「ぱっきぃ……ん」
次の瞬間、澄んだ音が響いた。
「……！」
その場にいた全員が驚いて声も出なかった。
「これで終いだ」
マルコシアスの剣で吹っ飛ばされた銀髪のセフィラは地面に叩きつけられて動かなくなった。
心臓の音が近い。ほとんど動いていないのに全身汗で濡れ、全力疾走した後のように息が切れていた。
ガキは驚いたようにマルコシアスを見てそしてたどたどしく言った。
「あ、ありが、とう」
「礼には及ばん」
マルコシアスは剣を収めると、純白の翼を一振りした。
サンダルを履いた褐色の足まであらわになったマルコシアスを見たのは久しぶりだ。
契約の時の覇気はそのまま、あの時の恐怖がよみがえりそうになって思わず身震いした。
「大丈夫か　過去を持たぬ少女」
「平気です。助かりました」
答えたガキに満足げに微笑むと、あきれたように自分を見た。
「アレイ　お前はまだ修行が足りぬな」
「……精進します」

まだ少女に死が迫ったときの衝撃が体の中に残っていた。
鼓動がまだ緩やかさを取り戻さない。
落ち着け。なぜこんなにも動揺している？

必死で冷静さを保とうとしていると、いつの間に召還したのかねえさんが使役する悪魔クローセルが銀髪のセフィラ二人をずるずると引っ張ってきた。
金髪に碧眼、純白の翼と金冠を持つクローセルは口を開きさえしなければ立派な天使に見えるだろう。初対面ではないが、クローセルと話したことはほとんどない。
「んで？　こいつらどうするんだ　ねえさん」
「王都に連行するわ」
地面に転がった二人を見て、ガキがはっとしたように駆け寄ろうとした。
マルコシアスがたくましい腕でそれをとどめた。
「なぜだ」
「え？」
「あれは　敵だ　なぜ　殺されかけてなお　近寄ろうとする？」
マルコシアスは厳しい口調で聞いた。
これまでこのガキに見たこともないほど優しい態度をとっていたことから考えると不思議なくらいに真剣だった。
「……ずっと会いたいと思ってた。このヒトはおれの過去に関係あるんだ。もしかするとおれが知らないおれを知っているのかもしれない」
「やめておけ　アレイと金色猫に任せよ」
「でも」
なおも食い下がろうとすると、ねえさんがクローセルを促した。
「クローセル、ラックを馬車の中へ」
「あいよ」
「わっ」

金髪碧眼の天使のようなクローセルの細腕に抱えられて、ガキは馬車に強制退場させられてしまった。
「それじゃ、王都に送りましょうか。バシン！」
ねえさんは悪魔の名を呼んだ。
「俺は便利屋じゃないですぜぃ」
空間にふと現れたのは黒ずんだ奇妙な肌の色の屈強な男性の姿だった。もちろんそれは人間ではない。
背には蝙蝠のような翼が生えているし、蛇の頭に似た尻尾がゆらゆらと揺れながら飛び出している。いや、舌を出し入れしているところを見るとあれは本物の蛇なのだろう。
「ごめんなさいね、バシン。このセフィラ二人を王都の牢へ直行させて欲しいの」
「ただでとは言いませんよね？」
「分かってるわ」
ねえさんはどこからか取り出したナイフでぴっと左腕をきった。
すう、と赤い線が入って血が溢れ出した。
「今日もうまそうですねぃ」
ふわりと地面に降りた悪魔はねえさんと並ぶと巨人のようだった。
うれしそうに腕を取ると尖った長い舌をねえさんの腕に這わせている。ぴちゃ、ぴちゃという音が耳に届いて、思わず顔をしかめた。
「ねえさんの血は　いつもうまいですぜ」
「そう」
ねえさんは眉一つ動かさずその悪魔の食事を見ていた。
やがて傷口から血が流れなくなった後も悪魔バシンは名残惜しそうに腕をなめていた。
それからしばらくして、十分堪能したのか悪魔は大きな手のひらを地面に向けた。その先には銀髪のセフィラ二人が伸びている。
「行け」
その一言でセフィラの姿は消え、地面には微かな血の跡だけが残った。

「もう少し呼び出してくれてもいいですぜぃ　ねえさんならいつでも歓迎だ」
「私があなたの力を借りるのは用がある時だけよ」
ねえさんが冷たく言い放った。
クローセルといいバシンといい、ねえさんの悪魔はどうにもねえさんに懐きすぎている気がしなくもない。これはこれで大変なのだろう。
ちらりと自分の悪魔――マルコシアスを見ると、褐色の肌の戦士は未だ険しい表情でいた。
あのガキを気にしているのか？
まあ、そんなことはあるはずないが。
「ありがとう、バシン。これからもお願いね」
「分かってますって」
その瞬間煙のようにバシンの姿は消え去った。
「さ、アレイ。先を急ぐわよ！」
「我も戻る　精進せよ」
「はい。ありがとうございました」
礼をしている間にマルコシアスの姿は消えていた。

馬車の中に戻ると、ガキはちゃんとおとなしく席についていた。
「銀色のヒトは？」
「もう王都に送ったわ」
「え？」
「私のコインは5つもあるのよ。呼び出せるのはクローセルだけじゃないわ」
「ねえちゃんすごい！」
「一応俺たち天文学者のリーダーだからな」
一応どころか名実共にリーダーはこのねえさん以外考えられない。
「そうなんだ」
「王都に到着して、王様に挨拶したらあなたも国の天文学者として

グリモワール王国に仕える立場になるわ。そうすれば、また私があなたの上司よ」
「やった！　それじゃあ、今までとあんまり変わりないね」
「そうね」
ねえさんはにこりと笑った。
ああ、そうか。ゼデキヤ王はこういう形でねえさんの要望を取り入れたのか。さすが情の厚さにかけては歴代随一と言われるだけのことはある。

嬉しそうに笑うガキの横顔を見てほっとする自分がいる。命の危険にさらされたあの瞬間に心臓を貫いた衝撃には気づかなかったことにしたかった。
容姿だけでなくすべてを失いたくないと思い始めた自分をどこか心の奥底に閉じ込めた。
まだいい。そのうちきっとどうしようもなくなる時が来る。
馬車はまた走り出して、王都はもうすぐそこまで迫っていた。

SECT．13　王都ユダ＝イスコキュートス

出発してから5日。
ようやく王都ユダ・イスコキュートスに到着した。ジュデッカ城を中心に幾重にも城壁が取り巻いている様子をガキが大きく目を開いて見ている。
どうせモンブランみたいだとかそんなくだらないことを考えているんだろう。
「大きい街だね……」
ほう、と息をついた。
確かにジュデッカ城は王が住む城にふさわしい壮大な城だ。いくつもの塔が天を指しており、それは大小合わせて５０近くあるだろう。城の建物もひとつではなく、１０以上の大きな建物の集合である。城の周りは3重の隔壁が取り囲んでおり、堅固な要塞都市の名に恥じない威風堂々とした構えだ。
「そうね。もっと大きな街は他にたくさんあるのだけれど、王の住むジュデッカ城があるからやっぱりそれなりに大きな都市になるわ」
「もっと大きな街もあるの？」
「そうよ。城壁で囲まれていない商業都市なんかはもっと広いし、貿易が行われている港町はもっと人が多いのよ」
「すげえ！」
嬉しそうに目を見張る様子はまさにガキそのものだ。
都市への入り口を過ぎるときも名残惜しそうに護衛の兵士を見送っていた。
何がそんなに珍しいんだ。
「今のがインフェルノ・ゲートよ。外と王都ユダを隔てている最初の2枚の壁を合わせてインフェルノ外郭と呼ぶわ」
「街全部を囲んでるの？」
「そうよ」

二つ目の城壁を抜けると、目の前に大きな広場が現れる。
始まりの丘だ。
ここへ来ると王都へ帰ってきたという実感がわいてくる。
「さあ、少し降りて王都を見学しましょう」
ねえさんに言われて3人で馬車から降りた。
この広場は町並みよりも少し高い丘になっていて町全体の様子が展望できるのだ。
「ここは始まりの丘。インフェルノ・ゲートを過ぎるとまず旅人はここで町を見渡すことになるわ」
「うわあ！」
ガキが思わず感嘆の声を漏らした。
この都市は大きく十字に街を貫くメインストリートから放射状に細い道が四方八方に伸びているのが特徴だ。縦横に整然と道が並んでいない分、迷いやすいことに関しては定評がある。
「ここより少し高いところにもう一枚城壁があるでしょう。あれが、プルガトリオ外郭。正面に小さく見える門がプルガトリオ・ゲートよ」
「あの、大きなお屋敷は？」
「貴族や、位の高い騎士がお屋敷や別荘を持っているの。一般の人は許可がないとプルガトリオ外郭の中には入れないわ」
「ねえちゃんの家もあの中？」
「そうよ、アレイもね」
にこりと笑ってねえさんはジュデッカ城を指した。
「そしてあれがジュデッカ城。今はゼデキヤ王が住んでらっしゃるわ。その周りを取り巻いているのはパラディソ外郭。あれを門以外から乗り越えるのはほぼ不可能よ」
「すごい！」
「さあ、行きましょう。王様がお城で待ってらっしゃるわ」
「うん！」
ガキのはしゃぎようにはついて行けなかったが、いつものように

実家に帰ることが憂鬱ではないのも確かだった。
それがガキのおかげだとは決して口に出したりしないが。

街に入ってからもガキは興奮しっぱなしだった。
「すごいたくさんヒトがいるよ！　道が広い！」
景色がゆっくりと後ろに遠ざかっていく様子を窓に張り付いて見ている。
メインストリートでは連日、市が開かれている。
「ここは城下の市場よ。海からは少し距離があるけれど、ユダ川の水運が発達しているから海の幸も山の幸もすべてが集まっているわ。このあたりは平野だから、周辺地域で採れた穀物も多いわね。すべてはこの国の温暖で湿潤な気候がもたらした作物よ」
「ほんとだね」
「このメインストリートの市場を抜けるとすぐプルガトリオ・ゲートがあるわ」
ガキがぱっと振り向いた。
この顔をした時のガキの考えは知れている。
「買い物したいよ！」
「だめ。王様に会ってからよ」
「むー」
「落ち着いたらアレイにでも連れてきてもらいなさい」
唐突な言葉に思わず口が勝手に動いた。
「はあ？　何で俺が」
「いいじゃない、仲良くなったみたいだし」
「「よくないっ！」」
二人でハモってそう叫ぶと、ねえさんはさもおかしそうに笑った。
くそ、ガキと同時に言葉を発するなんて不覚だ。
「何言ってるのよ。誰がどう見ても仲良しさんだと思うわよ？」
「嘘だー！」
またガキはきゅっと眉を寄せて唇を尖らせた。

その顔は年相応じゃないからやめろと言いたい。
「やめてくれ、こんなガキのお守りなんか……無駄遣いが関の山だ」
「ガキって言うな！」
なぜかこのガキ相手だとぽんぽんと口から台詞が零れ落ちてくる。
「ガキにガキと言って何が悪い」
「ほらほら、やめなさい二人とも」
このやり取りにも慣れてきてしまったのが嫌だ。
「だってアレイさんが！」
ガキがこちらに指を突きつける。思わずむっとして言い返す。
「先に突っかかってきたのはお前だろう」
「だからやめなさい。プルガトリオ・ゲートに着いたわよ」
だから入門手続きをしてきなさい。ねえさんが暗にそう告げた。
「……ちっ」
舌打ちして、入門手続きのために馬車を出たが、不完全燃焼だ。
まったく、いったいあのガキの頭はどうなっているんだ。きっと一度検査したほうがいい。
そしてねえさんの中で俺とあのガキが異様に仲がいいことになっている。これも早いうち正したほうがいいだろう。でないとねえさんのことだ。いったい何を妄想しだすか分からない。
買い物に連れて行けと言われているうちはまだまだかわいいものだ。

SECT．１４　家ニテ待ツ者

プルガトリオ・ゲートを通り過ぎてまず向かうのはねえさんの屋敷だ。
二人をそこで下ろしてから自分は屋敷に戻る。
「王様に謁見するときは、そんな服じゃだめよ」
ガキの服は淡いグリーンの短衣に黒のハーフパンツとジーンズのジャケットで、左手は包帯を巻き右手には黒い篭手をしている。
とても王に謁見する服とは思えない。
「んじゃどんな服がいいの？」
「そうねえ。私は天文学者の正装があるのだけれど……あなたはどうしようかしら」
ねえさんは考えあぐねているようだ。
王に謁見するときのレメゲトンの正装は黒いドレスに黒いマントが一般的だ。
「本当ならドレスがいいのだけれど、私の服はすべてオーダーメイドだから……合うかしら？」
「ガキに合うわけがないだろう」
どう見ても身長も体型も違いすぎる。
するとねえさんはにやりと笑いながら言った。
「あら、ラックはこう見えてスタイルいいのよ！」
「そんなことは言っていない！」
いったいどこをどう曲解したらそうなるんだ。
「まあそんなことどうでもいいけれど……」
どうでもいいならいちいち言うんじゃない！
当の本人はまたもきょとんとして阿呆面をしてねえさんを見上げていたけれど。
本当に何も分かっていないような顔を見ているとその額をはたいてやりたくなる。きっといい音がするはずだ。

「大丈夫よ、ラック。私が服を見繕ってあげますからね」
「うん！」
「あの変態おにーさんの事なんか放っておいていいのよ」
「はあ？！」
「へんたい？」
ガキは首をかしげた。
肩までの黒髪がさらりと揺れた。きっと細身に象牙色の肌と黒髪だから黒のドレスはよく似合うだろう。
くそ、こんなこと考えていたらねえさんの思う壺だ。
「いいのよラック。分からなくても」
「そ？」
ねえさんに頭をなでられて嬉しそうなガキを見ていると本当にいらいらしてくる。
馬車は大きなファウスト家の屋敷の門を抜け、そこからよく手入れされた庭を抜けて、大きな建物の前で停止した。
「アレイさんは？」
「俺は自分の家に戻る」
「昼食前には迎えに来てね、アレイ」
「分かっている」
ねえさんは俺のことを御者か何かと勘違いしてやいないだろうか？
まあ、いい。
とにかくつい先日帰ったばかりの実家へ戻ることにしよう。忙しい両親のことだ、おそらく家にはいまい。姉も2年前に結婚したから家はもぬけの空のはずだ。
見慣れたドアを自分で開けると、意外な声がした。
「お帰りなさい、アレイ」
「……姉上」
玄関で自分を迎えたのは結婚して今は家にいないはずの姉だった。
淡い緑のふわりとしたドレスが淡いこげ茶の髪によく映えている。
ゆるくウェーブがかかった髪を結い上げて、金のバレッタでとめて

いた。
華奢な首に妖精（フェアリィ）の羽を模したペンダントをしている。
「ありがとう、これ……貴方でしょう？」
姉はペンダントを指した。
身内の自分が言うのもなんだが、姉は美人だ。レメゲトンのねえさんが気の強い姉御肌なら、この実の姉は穏やかですべてを包み込むような温かいオーラの持ち主だ。
気立てがよい美人で、学問にも秀でた姉が実のところ少し苦手だった。ふわりとした柔らかな雰囲気を持ちながらまるで自分の全てを見透かされているように感じるところもさらに近寄りがたくなる原因だろう。
「誕生日、でしたから」
ほとんど年の離れていない姉はつい先日に２５歳の誕生日を迎えた。
「もう、差出人の名前もないものだから困りました。恥ずかしがりは直っていないようね、アレイ」
ころころと鈴が鳴るように笑う姉を見て妙に気恥ずかしくなる。
自分と同じ紫の瞳を見つめていられなくなって少し視線をはずした。
「ちょうど1年ぶりかしら。そう、去年も誕生日には贈り物だけ届けてくれたわ」
「忙しく国内を回っていますから……」
「でも、もう落ち着くのでしょう？　クラウド様にお聞きしたわよ」
クラウド様、というのは姉の結婚相手――つまり自分の義兄にあたる人物だ。
「クラウド様もお元気ですか？」
「ええ、貴方が帰ってくると聞いて喜んでいたわ」
「光栄です。落ち着いたらご挨拶に参ります」
「ぜひ、その時は新しい子を連れてきて。ぜひ会ってみたいわ」
もうそこまで話が届いているのか……義兄のクラウド＝フォーチ

ユンは王都に駐留する二つの騎士団のうちの一つ、漆黒星騎士団（ブラックルビー）長であるのだから当たり前といえば当たり前だが。
「どんな子なのかしら？」
「……」
問われて困った。
おそらくあのガキを端的に表す言葉は『阿呆』か『鳥頭』のどちらかだとは思うが、さすがに実の姉の前でそれを言うのははばかられた。
困った顔からいったい何を読み取ったのかは知らないが、姉は質問を変えてきた。
「かわいい子なの？」
かわいい……か？まあ容姿だけなら認めてもいいだろう。
事実はじめて見た時には心惹かれるものがあった事実は否めない。それが恋愛感情とはかけ離れたところにあったとしても。
「黒髪に象牙色の肌を持つ非常に美しい少女です。口さえ開かなければ」
「あら、何か含みのある言い方ね」
「何と言うか、その、知恵遅れというか……精神年齢がいささか……」
しどろもどろになると姉は蕾がほころぶように微笑んだ。
「珍しいわね、貴方が言い淀むなんて。どんな子か楽しみだわ。ファウスト女伯爵が大切に育てたというグリフィス家の末裔でしょう？」
「はい。3年前全ての記憶をなくしていたところをファウスト女伯爵が発見したと聞いています」
「王家から隠蔽するなんて本当にとても大切に育てたのね」
「そうですね」
ねえさんがガキを溺愛していることは一目瞭然だ。
「じゃあその子に手を出したらただじゃすまないわね、アレイ」
「え？」

どこかで聞いたような台詞にどきりとした。
「楽しみだわ、アレイのお気に入りなんて」
「え？」
どうしてそんなことになったんだ？
「素直でかわいい子だといいわあ。義妹になるかもしれないんですもの」
「はあ？」
いったいどこをどうしたらそこまで飛んだ話になるんだ。
本当にこういうところはねえさんと実の姉とがそっくりだと思う。と、言うかこの二人がそろうと実際かなり危険である。それは子供の頃から叩き込まれてきたことだ。
「……」
どうにかしてこの姉とレメゲトンのねえさんとあのガキを会わせずに済む方法はないか。
ガキよりはかなりよくできているはずの頭をフル回転させてみたが全く思いつかなかった。

SECT．15　渡サレシ悪魔

気が気でない心情をもてあましながら数年ぶりに姉と向かい合わせで昼食をとってからすぐ、ねえさんに言われたように謁見用に馬車を手配して家を出た。

実の姉は家の外まで見送りに出て手を振っていたがとても振り返す余裕はなかった。

そう言えばガキの服はちゃんと用意できたのだろうか？

ねえさんの家の前でしばらく待っていると、ガキが真っ先に馬車に乗り込んできた。

「お前……」

ガキの格好を見て思わず絶句した。

「どういう理由でそんな格好になったんだ？」

「んとね、ヨハンに借りた」

ガキが着ていたのは見習い騎士用の正装だった。そういえばねえさんの実の弟のヨハン＝ファウストはついこの間騎士の地位をもらったと聞いた。見習い騎士の正装はもう使わないのだろう。

銀の脛当てと白のマントが妙に似合っていて、なんともいえない感情を全部ため息に乗せて吐き出した。

「……」

ガキは少し困ったように自分のほうを見ていたようだ。

後ろから入ってきたねえさんは天文学者の正装をしていた。

刺繍の入った黒のドレスにシルクの黒いマント。金のチェーンベルトにはコインを下げてある。

「仕方ないわ、本当はドレスを用意したかったのだけれど、私の服が合わないんですもの」

「……そうだろうな」

「残念だったわね、ドレス姿のラックが見られなくて」

もう、いい。

姉上にしてもねえさんにしても俺を好きなように解釈するといい。
抵抗するのもむなしくなって窓の外に目を移した。
「これは女性の天文学者の正装なの。天文学者の位を表す色は黒、そして国を守る役職につくものはマントを羽織ると決まっているわ。何より、古来の女性天文学者は『ウィッチ』と呼ばれ恐れられていた。伝承に残る彼女たちは黒のワンピースに黒のマント……つまり、今の私に近い姿をしていたと言われているのよ」
なるほどと頷いたガキは、自分のほうに目を向けた。
「アレイさんはいつものマントと違うね」
普段着のマントを着て王に謁見するわけがないだろう！
と叫びかけてぐっとこらえる。
無駄に叫んで体力を消耗するのも癪だ。
自分の服はねえさんのドレスと同じように刺繍が縫い取ってある黒を貴重とした外套を、コインを嵌め込んだ幅の広いベルトで止めている。
他には階級章もないとてもシンプルなものだ。
「これは男性用の正装だ」
「ふうん。おれの格好と似てるね」
本当にもうこいつは……！
「お前と同じ服を着た記憶はない」
「似てるって言っただけじゃないか！」
ねえさんはいつもより少し厳しい口調でたしなめた。
「ラック、ジュデッカ城に入ったら絶対そんな大声出しちゃだめよ？アレイももうすぐ２４になるんだから子供をからかうのはやめなさい」
「わー、ねえちゃんまでおれのこと子供って言った！」
「もう、ラックだって２０近い年のはずよ？　おとなしくしてなさい！」
「むー」
本当に勘弁してくれ。

城に着く前に疲れてしまいそうだったので、ずっと窓の外の見慣れた景色だけを眺めていた。

４年ぶりのレメゲトン認証式。

この時ばかりは堅苦しいことを厭う王も正式の場に現れる。普段は城の奥に厳重に保管してある王冠を引きずり出してきたのか、あの分厚いマントはどこにしまっているのか、謎は尽きないが謁見の間に入った瞬間張り詰めた空気は本物だった。

「ただいま参上いたしました」

ねえさんと並んで進み出て、赤い絨毯に膝をついた。

純白の甲冑に身を包んだ輝光石（ダイヤモンド）騎士団長サンアンドレアス＝ヴァルディスと、漆黒の甲冑に身を包んだ漆黒星（ブラックルビー）騎士団長クラウド＝フォーチュン。

「堅苦しい挨拶はよい。今回はグリフィス家の末裔にグリモワール王国レメゲトンの位と使役するコインを与えるために呼んだのだ」

「はい」

ねえさんがガキのほうを振り向いて、前に進むよう促した。

ガキがおずおずと前に進み出る。先ほど城に入ったときも思ったが、どうやらこいつでも緊張することがあるらしい。

「名は？」

「ラックです」

「ふむ。少女と聞いていたのだが？」

王の問いにはねえさんが言葉を濁した。

「申し訳ございません。なにぶん急なことで正装は間に合わず……」

「そうか」

王は特別そのことについて言及するつもりはないようだ。

普段から謁見の間を封印に近い状態で放置している王のことだ。格式についてどうこう言うつもりはないのだろう。

「少女、これからはグリフィス家の末裔としてラック＝グリフィスを名乗るがよい。グリモワール王国レメゲトンの位と、第２番目の

悪魔アガレスのコインと第６４番目の悪魔フラウロスのコインを授ける」
王の言葉に耳を疑った。
フラウロスだと?！
「……ありがとうございます」
ガキが首をかしげながら言った。きっと何がなんだか分かっていないのだろう。
「第２番目の悪魔アガレスは地震を、第６４番目の悪魔フラウロスは地獄の業火を操るという。グリモワール王国のため、我がために日々精進せよ……下がってよいぞ。詳しいことは後ほどヴァイヤー老師が伝えるだろう」
「はい」
動揺を表に出すわけにはいかない。
最後に部屋を出るときもう一度３人で深く礼をしてから、その広間を後にした。

SECT．16　焦リト迷イ

部屋を出てすぐ、ガキは大きく伸びをした。
「なんだか疲れたよ」
「仕方ないわ。これはレメゲトンになるために必ず踏まなくてはいけない手順の一つよ」
「今のが？」
「ええ。レメゲトンの地位を与えるときは、二人以上の現職のレメゲトンと二人以上の王国騎士団長がいる前で王が宣言を行う必要があるの」
「めんどくさいんだね」
控え室としてあてがわれた部屋でヴァイヤー老師が現れるのを待つことになった。が、とても和やかに紅茶を飲む心境ではない。
ガキに与えられた第６４番目の悪魔フラウロスは地獄の業火を操る灼熱の豹。その姿を見たものは炎に怯え陽炎に慄くという――だが、畏怖すべきは姿形だけでない。過去幾人ものレメゲトンを気に入らないという理由で焼き払ってきた恐ろしい獣である。
それをレメゲトンになったばかりのこんなガキに渡すなど、王はいったい何を考えている？
悪魔には大きく分けて二種類ある。
一つ目はマルコシアスやクローセル、ガキが今回手にしたアガレスなど、以前天使であったが魔界に下った俗に『堕天』と呼ばれるものたちだ。悪魔の中ではかなり友好的で、魔界へ来た人間をこちらに返したがらないことはあっても基本的に殺すことはない。
もう一つは、もともと魔界に生まれ育った悪魔だ。好戦的で残虐、恐ろしく冷酷なものも多いという。
「ゼデキヤ王の意図が分らん。こんなガキにフロウラスだと？　このガキを体よくつぶしにかかったとしか思えん」
「違うわ、アレイ。ゼデキヤ王はこの子の秘めたる力をお見抜きに

なったのよ」
「そこでなぜそのコインが出てくるんだ。せめてもう少し大人しいコインで修行を積んでから……」
「若造、何も分っておらんな」
そこへしゃがれた声が割り込んだ。
「ヴァイヤー老師」
「すでに悪魔と契約した天文学者がもっと強い悪魔と契約するには一度目の何倍もの力がいる。逆に、最初に契約した悪魔が強ければ強いほど次の悪魔との契約は簡単になる。力とはすなわち精神力。いうなれば意志の固さだ」
久しぶりに見るくそじじぃはまた少し老けたような気がした。
褐色の肌のしわがまた増えた気がする。床まで届く濃い紫色のローブから除く手首は骨と皮だけになっているのではないかと思えるほどに細い。
「お主がグリフィス家の末裔か……女だと聞いたのは己の聞き違いか？」
くそじじぃは本当に不思議そうに聞いた。
まあ、無理もない。
「いえ、正装を支度する暇がなくヨハンの着ていたものを拝借した次第です、老師」
「そうか」
くそじじぃは紅茶を持ってきた侍女に軽く礼を言った。
テーブルに向かうその足取りがひどくゆっくりとしたものになっている。よる年波には勝てないらしい。
じじぃは年をとっても鋭さを失っていない青い瞳に厳しい光を灯してガキに問う。
「名はなんと言う？　少女」
「えーと、ラックです」
「ラック＝グリフィスと名乗りなさい。それに、目上の人には敬語を使うのよ」

「ラック＝グリフィスです。よろしくお願いします」
「そうそう、これから人に名乗るときはそう言うのよ」
「はあい」
いつもの阿呆面になって、ふにゃりと相好を崩す。
じじぃは驚いて目を丸くした。
仕方がない。まさかこの見た目から……男装の麗人とも呼ばれるだろうこの容姿から3歳児のような発言が飛び出すのだから。
「精神年齢が低いんだよ、このガキは」
「ほう」
「私が3年前に拾った時には過去の記憶すべてをなくしていたわ。一体何があったのか分からないのだけれど、その時この子は全身にひどい傷を負っていて声も出せない状態だった」
これは初めて聞く話だった。
3年前に山で全ての記憶をなくした状態で拾ったとは聞いたが、怪我の話も声が出なかったことも初めて聞いた。
「最初の1年丸々かけて回復して、2年間で探索者の仕事をちゃんとこなすようになったの。おそらくその影響があって今のこの子の精神年齢が形成されたんじゃないかと思うわ」
声が出ない。そんな風になるなんていったいこのガキはどんな目にあったんだろう。
全身にひどい傷を負って、記憶もなくして……そこから回復するにはどれほどの苦労があったことだろう。
ねえさんはガキの頭をなで、ガキは嬉しそうに笑った。
この二人の間にある絆が何か少しだけ分かった気がする。
ガキがねえさんを何より必要とする理由も、世界の全てをかけてねえさんを慕う訳も。
「この子の心はまだ何色にも染まっていないの。何も知らない無垢な心を持っているわ。この子を天文学者にするなんて……私だって本当に嫌だったわ。でも、そうしないとこの子を私の傍においておくことは出来ない。逆に言えば、たとえレメゲトンになったって私

の傍にいさえすれば守ることが出来るもの」
ガキは真直ぐな瞳でねえさんを見上げた。
無垢な心。
その全てがこの瞳と笑顔に表れている。
「おれねえちゃんと一緒にいるよ？　どこにも行かないよ？」
「そうね」
くそじじぃの瞳から厳しい光が消え、まるで幼い子を見るような優しげな瞳になった。
「刷り込みのようなものか。鳥は最初に見たものを親と信じてどこまでもついていくという」
「この鳥頭が」
ほんの少し苛立ちが募る。
この二人の間の強い絆を感じるたびにちりちりとした炎がほんの少し心の端を焦がす。
この炎の正体は未だ知れない。
「まあよい。お主が国を裏切らない限りこの少女も国に仕え続けるだろうからな」
胸の端をちりちり焦がす感覚が消えない。
いったい自分はどうしてしまったんだろう。
「己が来たのはそのコインがどのようなものか、お主はこれからどういう立場になるのか、そして悪魔を使役するにはどうすればいいのかを伝えるためだ」
くそじじぃは幼い子に諭すようにゆっくりはっきりと言葉を紡いだ。
「今回ゼデキヤ王は第２番目アガレスと第６４番目フラウロスをお主に与えた。アガレスは地震を起こす力を持ち、フラウロスは地獄の業火を操る力を持つという。どちらも恐ろしく強大な力を秘めたコインだ」
「どんな悪魔さんたちなの？」
「アガレスは老いた紳士の姿で現れるという。その姿は優美にして

壮麗だが、その言葉に曖昧さが多く入り混じる。伝承によるとまるで問答のようにして会話を進めるらしい」
「問答ってなぞなぞのこと？」
「そうだ。アガレスの言う言葉を真に受けてはならん。そこには確かに真実があるのだが、それは幾重にも折り重なった霞の奥に隠された至宝だ。アガレスの言葉を何度も何度も噛み砕いて考えるとよい」
アガレスは博識だ。その上言葉の扱いに非常に長けている。
単純明快な脳みそを持つこのガキに操れるはずがない。契約に行ってそのまま帰ってこないのがオチかもしれない。
「こいつにそれが出来るわけがない」
口からこぼれた言葉にガキが即座に反応する。
「出来ないかもしれないけど、がんばるもん！」
漆黒の大きな瞳は強い意思を帯びていた。
これは『一つだけ』を決めて、それだけを見つめている目だ。
ガキはすぐにくそじじぃへと視線を戻し、真剣なまなざしで問いかけた。
「もう一人のほうは？　えーと、フラウロスさん」
「フラウロスは大きな一頭の豹の姿で現れる。人の姿もとるが、それはごく稀らしい。色は炎のように燃え盛るオレンジに黒の奇怪な斑点がある。瞳は燃え盛る炎の色だ」
ガキはそれを聞いてコインを二つ引っ張り出した。
それに続いて……最初から持っていた、グラシャ・ラボラスのコインも。
くそじじぃはさすがに嫌そうな顔をしてたしなめた。
「そのコインは使わんでいい。お主の過去への道しるべとして大事に持っておきなさい。グリフィス家の末裔である証だ」
「このコインの悪魔さんはどんなヒトなの？」
「……使わんのだから知らんでいい」
ガキは素直に言われたとおりコインを胸元にしまった。

それを見てじじぃが驚いたような声を出す。
「時に聞くがお主、コインはいつもそこにあるのか？」
「そうだよ。寝る時もお風呂はいる時もずっとつけてるよ」
「何と！」
驚いたのはじじぃだけじゃない。自分も十分すぎるくらい驚いた。
思わず頭を抑える。少しだけ……ゼデキヤ王がなぜこの二つのコインを託したか分かった気がした。
分かりたくもなかったが。
「ゼデキヤ王がアガレスとフラウロスのコインを託すわけだな。何という耐性の強さだ。この若造並みではないか」
くそじじぃがため息混じりに言った。
ガキはまたも何を言っているのかわからない、という顔で首を傾げ、ねえさんに回答を求めた。
ねえさんは困ったように解説する。
「悪魔のコインは普通の人にとっては毒みたいなものよ。近くに置き過ぎると体調を崩したり精神に異常をきたしたりするの」
まさにねえさんの言う通りだ。
レメゲトンになるときに付きまとう危険は契約のみならずその毒性にもある。
「でも、私たち天文学者になる者は悪魔のコインに対する耐性を持っていて、少しくらい持っていても平気なのよ」
「耐性の強さは人によって違う。俺やねえさんはそれなりに強いが……」
そこまで言ったところでねえさんに分断された。
「アレイ、あなたみたいな鉄の耐性と私を一緒にしないでくる？」
ずっとコインを手首に巻いている自分のことは棚に置いて、気にせず続けた。
「だがこのくそじじぃはそろそろ無理だろ」
睨み付けるとくそじじぃも負けじと細く青い瞳で睨み返してくる。
「年寄りを敬え、若造」

「うるせえくそじじぃ。年を考えてそろそろ引退しやがれ」
「お主が一人前になったら考えてやらんこともない」
「だったらせめてコインの数を減らしやがれ！」
ここのところ老けたのは年のせいだけでなくコインの影響も強いはずだ。
「己以外に老賢者フルカスと話せるものはおらんよ」
このくそじじぃが！
その言葉を飲み込んでそっぽを向いた。
「アレイもずっとコインを手首につけたままよ。私やヴァイヤー老師は普段体から離して保管しているわ」
「おれはどうしたらいい？」
「そうね、３つとも癖のあるコインだから……」
この上ないくらいにな。
「身につけていた方がいいかもしれないけれど、コイン同士はあまり近づけない方がいいわね。明日にでも加工してあげるけど、仕方ないから今日は一緒に首に下げておきなさい」
「はあい」
ねえさんに対していつものように素直な返事をしたガキを、じじぃが見たこともないような優しい瞳で見つめる。
「己に孫がおったらこのくらいか」
「んじゃあ、おれにじいちゃんがいたら老師さまくらい？」
「……そうかもしれないわね」
「じぃ様って呼んでいい？」
「かまわんよ」
このガキはまったく、やりたい放題だな！
そんな自分の視線に気づいているのかいないのか、ガキはにっこりと微笑んだ。
「仕方がない、孫のためじぃ様はがんばるとするか」
くそじじぃは椅子から離れた。
孫のために……明日行われる悪魔との契約のため、魔方陣を準備

するのだろう。
契約のことを思い出してもう一度胸が痛んだ。
「今日中に魔方陣を完成させておく。明日また来るといい。神殿で待っておる」
「よろしくお願いします、ヴァイヤー老師」
くそじじぃを見送ると、本当に明日このガキが悪魔との契約に望むのだという実感がわいてきた。それとともに不安がむくむくと頭をもたげてくる。
この不安はいったいどこから来るのか。時折発生していらだたせるあの炎の正体は何なのか。
もう自分でも気づきかけていた。
それでも認めてしまったらもう後戻りはできなくなるだろうことが分かっていたから。
気づかぬ振りをしてやり過ごそうとしていた。
それが無駄な努力だと知るまでそうはかからなかったが。

SECT．17　眠レヌ夜

その晩は家に戻っても眠れなかった。
姉上はもうすでに今の家――フォーチュン家の屋敷へ戻っており、家の中はやけに広くて寒々しい感じがした。
自分の部屋がいつもより広く感じるのはなぜなんだろう。
眠れない時は剣の稽古をするに限る。
心乱れる時はいつもそうやって気を落ち着けてきた。

「やあっ、たぁ！」
無意味に大声で気合をかけてみたりもするが、その合間の静けさがうるさい。
息を切らしながら稽古場の壁にもたれかかった。別館で作ってもらった稽古場は本館とは少し離れており、誰が来る気配もない。
静寂がうるさすぎて気がおかしくなりそうだ。一人でいては狂ってしまいそうだ！
「マルコシアス！」
闇の色の魔方陣が発動した。
剣の稽古にマルコシアスを呼ぶことは、これまでも何度かあった。ただ、全身を現したマルコシアスの威圧感は並大抵ではない。契約のときの畏怖も加わって、いつでも終わった後は泥のように眠りこけるのが常だった。
今日はそれがちょうどいい。何もかも忘れて眠りたかった。
ガキの笑顔も明日の契約のことも、胸の奥で疼く心の欠片も。
「どうした　アレイ」
「剣の稽古を……お願いします！」
褐色の肌の戦士に深く頭を下げた。
「ふむ」
戦士は自分を上から下までなめるように見た。

「何か迷っておるな　いいだろう　構えよ」
マルコシアスとの稽古はまだ未熟な自分にとって死闘に近いものになる。
雑念を取り払え。
今は剣先にだけ集中して……
その瞬間、あのガキの笑顔が目の前を通り過ぎた。
アシタ　契約　ガ
「集中せよ　アレイ！」
死ヌカモ　シレナイノニ
「くそっ！」
頭を振ってその考えを取り払う。
消えない。
あの笑顔が焼きついて離れない。
初メテ　会ッタ　ソノ日カラ……
「アレイ！」
マルコシアスの怒号。
はっとすると目の前の戦士からは闘気が完全に消え去っていた。
「今日はやめておけ　怪我をする」
「あ、あの……」
「黄金獅子の末裔か？」
「！」
なぜ分かったのだろう。
大きく目を見開いていると、マルコシアスはさもおかしそうに笑った。
「変わらぬな　実直で不器用　いつも」
「……！」
こんな風に自分のことを話すマルコシアスは初めてだったので、思わずどきりとした。
「認めてしまえ　楽になる　もう気づいておるだろう？」
ねえさんも、姉上も同じ事を言った。

でも、マルコシアスに言われるのとは全く違う。初めて会った3年以上前の契約の時から畏怖の対象であることは変わっていない。
心臓がバクバクと脈打っている。全身から冷や汗が噴出した。
マルコシアスは少年のあどけなさを残す顔でにやりと笑った。
「あれは　極上だぞ？　アレイ」
「……」
強大な戦士のオッドアイは自分を貫いた。
もう逃げられない。
最後通告を受けた気分だった。
「近いうち花開く　そうすれば　権力者はこぞって　あれを奪おうとするだろう」
「それは……」
分かっていた。初めて彼女を目にしたときから。
グラシャラボラスのコインを持つ、黄金獅子ゲーティア＝グリフィスの末裔。つややかな黒髪に象牙色の肌、澄んだ黒瞳とそれに見合う清浄な心の持ち主だ。
今はまだ少女の域を超えないが、もう2・3年もすれば絶世の美貌を手にすることは間違いないだろう。
「誰にでも平等で　物事の本質を瞬時につかむ才能を持っているこの上ない素材だ」
「分かっています」
「奪われてからでは　遅いのだぞ？」
「そんなこと……」
知るか、といいそうになってあわてて留まった。
「アレイ」
「何ですか？」
「お前はレティに　よく似ている　もう何百年も経つはずだが」
マルコシアスの言うレティはおそらく初代炎妖玉騎士団長レティシア＝クロウリーのことだろう。最初にマルコシアスを使役した勇壮な女剣士。

よく似ている、の真意を掴みかねて反応を返せなかった。
「妙に格好をつけたがる所が特に　もう少しあの少女を見習うといい」
「……」
あれは、素直ではなく阿呆の鳥頭だ。
ねえさんに異常なほどに懐いていて、最近は生意気な口も覚え始めて、でも……
「明日、彼女が契約します。第2番目の悪魔、アガレスです。」
これまでの歴史の中で悪魔に取り入られ、帰ってこなかった者がいた。取り殺された者もいた。体を乗っ取られてやむなく処分された者もいた。
怖いのだ。もう二度とあのガキが帰って来ないかもしれないと思うとどうしようもなく胸が締め付けられてしまうのだ。
「契約に絶対はない、それはよく知っています」
「怖いか？　アレイ」
炎妖玉（ガーネット）と碧光玉（サファイア）のオッドアイが優しい光で自分を包み込んだ。
「それは……」
思わず口をつぐんだ。
これまでは畏怖の対象だったこの悪魔が、厳しくも優しい師の姿へと変化しようとしていた。
「怖い、です」
ポロリとこぼれた言葉が最後の堰を取り払ったように思えた。
堰を失った心は次々あふれ出して止まらなくなった。
「あのガキがいなくなると思っただけで震えが止まらなくなるくらいに怖い。明日の契約であいつが苦しむんだろうと思うだけで気が狂ってしまいそうなんです」
もう本当にどうにかなってしまいそうだ。
いったいいつ、どうしてこんなにも彼女のことを思うようになったのか自分でも分からない。気がつけば彼女の笑顔が頭を離れなくなっていた。

いや、違う。
分かっていた。最初から。あの街で、偶然彼女を見かけたときから――
「きっと初めて見たときからもう俺は……」
気づかない振りも認めたくない気持ちの抵抗ももう限界だろう。
初めて見てからまだ１０日も過ぎていないのに。
「愛しいという心に　時間は関係ない」
マルコシアスの声が耳に心地よい。もう何百年もクロウリー家に代々使役されてきた悪魔。見た目こそ少年のあどけなさを残しているが、実際過ごしてきた年月はその比ではないだろう。
その長い年月にこの悪魔はいったいどれだけのことを経験してきたのか、自分には想像もできない。自分にとっては伝え聞く伝説でも、目の前の悪魔にしてみたら実際に経験してきた事実なのだ。ゲーティア＝グリフィスとの召還も、暗黒の３３日間もすべてこの人自身が起こしてきたことなのだ。
「慎重さは　美徳だ　だが時に　勇気は必要だ」
「はい」
「間違えるな　己が望む事を　履き違えるな」
マルコシアスは微笑んだ。
あのガキとは違う、しかし人を見守る優しさを備えた笑顔だ。
いったいどれだけの歴史を見守ってきたんだろう。
「ありがとうございます」
「あのグリフィス家の末裔は　面白い　だが　多大な困難を抱えている」
「グラシャ・ラボラスですか？」
「それだけではない」
マルコシアスは少し悲しそうな顔をした。
「マルコシアス？」
まるであのガキのようにぽかんとした声を出してしまった。
「言えぬ　まだ早い」

マルコシアスの姿が透けた。
もう帰るのか。
「大切な者の傍を　離れるな　決して」
「ありがとうございました」
マルコシアスの姿は夜の闇に溶けるように消えた。
離れるな、と言った時のマルコシアスの痛切な表情がいつまでもわだかまっていた。

SECT．18　願ウ心ニ

自分自身で気持ちを自覚して認め、マルコシアスに素直になれと言われても、そう簡単に態度を変えられるものではない。
今朝はなぜかガキがじろじろと自分を見ている。落ち着かない。
思わず不機嫌な声が出た。
「何だ？」
するとガキはにこりと笑ってこう言った。
「アレイさんは綺麗だね」
「は？」
ああもうまたこのガキは訳の分からないことを言い出した。
本当に俺はどうしてこんな奴のことをこんなに気にしているんだろう？これは人生最大の謎と呼んでもいいだろう。
「いったい何を言い出すんだ。とうとう頭がイカれたかこのガキ」
「おれはいつだって本気だし思ったことしか言わないよ」
「だったらもともとイカれてんだな。いっぺん殴ったら戻るんじゃないのか？」
「殴られたら殴り返すからね」
ガキは唇を尖らせた。
もう何度目か分からないため息を吐き出して、頭を手で押さえた。
「……お前はだんだん生意気になっていくな」
「アレイさんのせいだよ！」
「本当にそうだわ」
ねえさんは楽しそうに笑う。
そうだ、図らずもねえさんの言った通りになってしまったのが少々気に食わない。
「今までそんな風にラックと言い合える相手はいなかったものね」
ねえさんに笑いかけられたのにガキは少し不安そうな顔をした。
何かあったんだろうか。

「よかったわね、ラック。アレイだけじゃないわ、老師様もきっとあなたのことを気にかけてくれるわ。ゼデキヤ王も、漆黒星騎士団（ブラックルビー）長のフォーチュン侯爵もお力になってくれることでしょう」
「ねえちゃんも一緒にいてくれるんでしょう？」
「そうよ。絶対にあなたを守ってあげる。何があっても、必ず」
「ほんと？」
「ええ。あなたが望む限り」
ねえさんの言葉はいつも強い意志を帯びている。
「大丈夫よ、ラック」
馬車は神殿に到着して、目の前の大理石で出来た大きな建物を見上げた。
これからこのガキは契約に向かう。
それを思うと不安で仕方ない。

待っていたくそじじぃと合流し、全員で地下にある契約の間に向かった。
薄暗いのは明かりが壁に灯されたランプの光だけだからだろう。大理石が敷き詰められた床には一面にびっしりと黒い模様が記してある。
ガキは目を丸くした。
「ここは悪魔と契約を結ぶ儀式に使う部屋だ」
「歴代のレメゲトンがここで幾人もの悪魔と契約を交わしてきたのよ」
コツリ
靴音が響いた。
地下は閉鎖されているから音がよく響く。
「動きやすい格好に着替えなさい。すぐに始めるわよ」
「わかった」
こくりと頷くと、なんとねえさんはその場でガキの服を脱がせ始

めた。
「？！」
いったい何を考えている？！
慌てて違う方向を見て気持ちを落ち着ける。
「お前たちは……着替えるならもっと隠れてやれ！」
「あら仕方ないじゃない。他に場所がないんですもの」
思わずねえさんに対して怒鳴ってしまった。
紺のアンダーウェアにワーキングパンツ、淡いグリーンの短衣、ベルトには短剣を差した――偶然にも初めてガキと会った時と同じ格好だった。
篭手をはめた右手を開いたり閉じたりしながら、ガキはねえさんに微笑みかけた。
こんな日でもいつもと変わらない明るい笑顔だった。
「ねえちゃん」
「なあに？」
「今日さ、帰ったらケーキ食べたいな」
ねえさんはまるで泣きそうな顔で笑った。
ガキが今日中に帰ってくることはまずないだろう。マルコシアスの時は3ヶ月、サブノックでも3日かかった。
「いいわよ。一番好きなクリームたっぷりのフルーツケーキを用意するわ」
「やった！」
嬉しそうに右腕だけで伸びをしてから、ガキはくそじじぃが示したひとつの魔方陣に向かう。
その後姿を思わず呼び止めそうになる。
ねえさんも表情を強張らせてガキを見つめていた。
「準備はよいか？」
「うん」
「召還した悪魔の言葉に耳を傾け、その問いに答え、血で契約をせよ。力とはすなわち意志の力。どれだけ強く自分を信じられるかだ」

「……よくわかんない」
実際、知識なの何の役にも立たない。
悪魔が見ているのは人間の魂そのものだ。いくら言葉を飾ったところで意味がない。
「とにかく自らの意思をしっかり持て。迷うな。じぃ様がお前に言えるのはそれだけだ」
「わかった。そうする」
「ラック、悪魔さんの話をちゃんと聞いて、きちんと答えるのよ」
「うん」
にこりと笑って頷いたガキは本当にいつもと変わらなかった。
近所にお使いにでも行くような軽い足取りで魔法陣の前に立った。初めて見るものに興味深々で魔方陣の絵とコインの模様を見比べている。
そうなのだ。いつでもこのガキは何に対しても一生懸命で、素直に自分の感情を表して、興味のあるものには何の躊躇もなく飛び込んでいってしまう。
たとえその先にある物が困難であったとしても。
「おいくそガキ」
堪らなくなって呼び止めた。
「なあに？」
ガキが漆黒の瞳をこちらに向けた。肩で揺れる髪が頬をなでた。
ゆっくりとガキに近づいた。
もうほとんど無意識だった。頭の片隅で、マルコシアスの言葉が響いた――愛しいという心に時間は関係ない。
本当にそうなのかもしれない。
自分よりずっと低い位置にあるガキの瞳はいつものように無垢な光を灯していた。
初めて見た瞬間からずっと奥でわだかまっていた心が爆発した。
堪えきれなくなって少女の背に手を回して大きく腕の中に包み込んだ。柔らかな黒髪が頬に触れた。

見た目より華奢なその肢体は折れそうに撓る。
腕の中の暖かな感触が何より愛おしい。今この瞬間自分がこの少女を『一つだけ』に選んだことを確信しながら艶やかな黒髪をなでた。
少女は驚いたようだったが抵抗せず、それどころか背に手を回してきた。
耳元に唇を近づけて、そっと囁く。
「死ぬなよ。帰って来い……くそガキ」
言ってしまってから何とも言えない熱い気持ちがこみ上げてきて、締め付けられるように胸が痛んだ。
言わなければよかったと後悔した。
口にしてしまって、もう戻れないことを実感した。
左の頬に軽く唇で触れた。
もう迷わない。
この少女を何からも守ろうと心に誓った。
「だいじょうぶだよ、アレイさん。ちゃんと帰ってくる」
少女の声はいつもと変わらず、でも強い意思を含んでいた。自分のことを受け入れてもらえたような気がしてほっとした。
このぬくもりを離すのは名残惜しかったが、いつまでもこうしているわけにはいかない。
そっと離すと、少女は自分を見上げて微笑んだ。
その笑顔を絶やさないように。
「その魔方陣の中に入り、悪魔の名を唱えるとよい」
少女は魔方陣に足を踏み入れた、
三角を二つ重ねた中にアガレスの象徴の紋様が描かれた魔方陣が地獄へ続く階段の入り口のように見えた。
「んじゃ、がんばるよ！」
困難を自覚しているのかどうなのか、少女はいつものように笑って、コインを強く握り締めた。
「アガレス！！」

次の瞬間、少女の姿はその場から消えていた。

SECT．19　大切ナ者へ

「行ってしまったわ……」
ねえさんの震えるような声が地下の空間に響いた。
「お願いよ、無事に帰ってきて頂戴……！」
ねえさんはきっと毎日だってケーキを用意して待つだろう。たとえ3ヶ月、あのガキが帰ってこなかったとしても。
自分はいったいこれからどうするのだろう？
ガキが無事に戻ってきたとして、どんな顔をして会えばいいんだろう？
「でもねえ、アレイ。手を出したら拳固じゃすまないって言ったわよね？」
「！」
しまった！
ガキしか目に入っていなかった俺は不覚にもねえさんのことを失念していたようだ。
「あの子、どこからどう見てもかわいいもの。アレイが気に入るのも仕方ないわ。でもね」
ねえさんの笑顔が怖い。
「まだ早いわ。ラックは私の手元に置きたいの。これからは一緒に暮らせるのよ？　一緒にお茶をしたり料理したり、お菓子作ったり……まだまだやりたいことがあるのに、まだアレイには渡せないわ！」
「いや、そんな……」
ねえさんの脳内でいったいどこまで進んでしまったんだ。
ガキはきっとこれからもずっとねえさんと一緒に暮らすだろうし、自分が入り込む隙なんてどこにもないように見える。二人の絆には干渉できない。
そう思った時ちくりと胸が痛んだ。

「俺には無理だ。あのガキが一番大切にしているのはねえさんの方だ。俺が入り込む隙なんてどこにもない」
「今はまだそうかもしれない。でも、あの子はきっといつか私以外を選ぶわ。それはアレイ、あなたかもしれないしもっと別の誰かかもしれない。それでも分かるの。あの子は広い世界を知り始めている。そうすれば私のことなんて……！」
「そんな馬鹿な」
あのガキがねえさんの傍を離れる日が来るなんて想像もつかない。
「あの子は素直すぎるの。しかも、全く弱味を見せようとしないのよ。他人を大切にしすぎるあまり自分のことが疎かになってしまうの」
ねえさんはまるで泣きそうな顔で自分をまっすぐに見つめた。
猫のように金色の瞳が少しだけ潤んでいる。
「それはねえさんを大事にしているからだ。あのガキはねえさんを困らせて嫌われたくないんだとはっきり言った」
今でも覚えている。『一つだけ』を選んだあの夜、辛いと言って愚痴をこぼし自分に助けを求めたあのガキの台詞。本当に苛立つくらいにねえさんのことばかりを考えている。
深い絆を感じるたびに苛々する。
そう、これは嫉妬だ。
全てを認めた瞬間に何もかも合点がいった。
「あの子があなたにそう言ったの？」
「ああ」
表情まではっきりと覚えている。今にも泣きそうになりながら消え入りそうな声でこう呟いたのだ――『やだよ、ねえちゃんを困らせて……嫌われたくないもん。』と。
「本当に？」
ねえさんは驚いたように目を丸くした。
あまりの驚きようにこちらが動揺する。何か言ってはいけないことを言っただろうか。

「そう……あの子が」
ねえさんは力が抜けたようにとん、と後ろの壁にもたれかかった。
「ねえさん？」
「初めてよ、あの子がそんな風に心の奥を吐露することなんて」
「あのガキはいつもそうしているじゃないか」
天真爛漫で、脳と口が直結しているんじゃないかと思うほどに素直な性格の持ち主だ。
「違うわよ。いつもの台詞と、あなたに言った台詞は」
ねえさんは安心したように微笑んだ。
「よかったわ……でも、本当に寂しいものね」
「は？」
ねえさんの言っている意味が分からない。
いったい何のことだ？
眉を寄せるとねえさんはくすくすと笑った。
「あなたは変なところで鈍いのよね。昔からそうよ。でもね、お願いアレイ。あの子の傍を離れないで。何があっても守ってあげて」
「……」
返答はできなかった。
もう自分の中で答えは出ていたが、それを口に出してしまえばもう後戻りできなくなることも分かっていたから。
「当たり前だ、って顔してるわよ？　アレイ」
ねえさんの顔にいつもの不敵な笑みが戻ってきた。
少なからずほっとする。ねえさんに落ち込んだ顔は似合わない。
そうやって他人に弱みを見せないところはそっくりだと思う。育て親にあのガキが似たんじゃないかと思うほどに。
「まあ、ラックのことですからあんなことされても気づかないでしょうね。あの子に思いを伝えていくのは大変よ」
言われて先ほどのことを思い出す。
思い出すたびに頭に血が上るような感覚に襲われる。死地へ旅立つ直前とはいえ、なんて事をしてしまったんだろう！

抱きしめた時の柔らかな感触や温かな鼓動を思い出して、頬が熱くなった。
「……別に伝わらなくても構わない」
「あら、そ？　でもそれでいったいいつまで我慢できるのかしらね。見ものだわ！」
完全にいつものペースに戻ってしまったねえさんを止める術はない。
くそじじぃがこちらを見て嘲笑したように見えたが、それは気のせいだと思いたい。そうだ、くそじじぃにも見られてしまった。これは失態だ。
「ああ、でもアレイを鹹かったら元気が出たわ」
ねえさんは大きく伸びをした。
「あの子は大丈夫よ。なにしろこの私が3年間も手塩にかけて育てた秘蔵っ子なんですから！」
「……そうだな」
このねえさんの育て子なら、契約でしくじるはずはない。何より、あのガキの素直な心はきっと悪魔にも届くはずだ。
マルコシアスが気にかけているくらいだ。同じ堕天のアガレスもきっとあのガキの心に何かを見出すだろう。
そう思ったら少し安心できた。
信じてあのガキを待っていよう。
これからのことなんてガキが帰ってきてから考えればいいことだ。

SECT．20　最速ノ帰還

ガキが契約のため向こうに行ってから半日がたとうとしていた。ここは地下だから分からないがきっと外では太陽が天頂を過ぎてしまったはずだ。

まだまだ帰ってくるはずはないのだが俺もねえさんもくそじじぃもその場を動こうとはしなかった。

会話はないが、その静やかな空気の中にあのガキを思っていることは歴然だった。

ねえさんは床に膝をついてじっと祈りをささげていた。じじぃは何を考えているのか分からない表情で杖を突いたまま立っていた。

壁にもたれて少し目を閉じた。

まぶたの裏に思い浮かべるのはあの少女の面影。

ちゃんと帰ってきたら、少しくらいは優しい態度をとれるかもしれない。いや、それはガキの態度次第な気がしなくもないが。

そうだな、『ガキ』ではなく名前くらいは呼んでやってもいいかもしれない。

「ラック！」

そう、こんな風に……

ねえさんの叫び声ではっとした。

「おお！」

じじぃも感嘆の声を上げた。

まさか！

「ただいま！」

ずっと聞きたいと思っていた声がした。魔方陣の中に立つ人影に、わが目を疑った。

それでも、漆黒の髪も大きな瞳もはじけるような笑顔も本物だった。

間髪いれずねえさんが駆け寄って人影を強く抱きしめた。

「よかった……！」
震えるような声がこれまでの不安を全部表していた。
心臓がどきどきした。
「えらく早いな」
無事に帰って着てよかった。そういうつもりだったのに、口をついたのはやっぱりそんな言葉だった。
横を向くとじじぃと眼が合った。
「これまでの歴史の中で最短やも知れん。実に恐ろしき少女よ」
じじぃはガキのほうに歩いていき、自分もそれに従った。
「アガレスは何とおっしゃった？」
「困ったら呼んでいいって。コインも、ちゃんと。ほら！」
ガキは嬉しそうに契約を終えたコインを見せた。
「じぃ様より少し若い感じの紳士で、シルクハットをかぶってたよ。すごく優しいヒトだった。でも、話が難しくて半分も分からなかったよ」
いつもと変わらない口調に心の底からほっとした。
そうだ。こいつはいつだってこいつのままなんだ。
「……それでよく契約できたもんだ」
自分も何を変えることはない。今までどおりこのガキに接すればいい。
唯一つ変わったとすれば、これからはこのガキの傍を離れないようにするというその一点だけだろう。

「さあ、おなかすいたでしょう。ケーキも用意しなくてはいけないわ」
「やった！」
ねえさんはガキの細っこい手首にアガレスのコインを細い鎖で固定した。
「ねえちゃん。ねえちゃんの時はどのくらいかかったの？」
「私がクローセルと契約したときは、大体1週間くらいかしら。契

約はすぐ済んだのだけれど、なかなかクローセルが帰そうとしなくて」
「1週間？」
ガキはびっくりしたような声を出した。
「アレイのときは、もっとかかったわよ。マルコシアスと契約に行って、帰ってきたのは3ヵ月後だったもの」
「3ヶ月！」
うるさいな、余計なお世話だ。
「剣の稽古をつけられていたんだ」
「すっごおい」
「帰ってきた時はぼろぼろだったわ」
余計なことは言わなくていい。マルコシアスとの契約に3ヶ月もかかったなど、クロウリー家の恥だ。
「でも、ちゃんと帰ってきた。それだけですばらしいわ」
「帰ってこないヒトもいるの？」
そんな当たり前の質問に、俺もねえさんも答えあぐねた。
帰ってくるものが2割に満たない時代が長かった。だがそれを知っていながら契約に送り出した後ろめたさがあった。
「帰って来ぬ者のほうが多い。大体9割は契約しようとした悪魔に囚われ、一生を向こうで終える。もしくは……命を落とす者も多いのだ」
じじぃの言葉にガキは目を丸くした。
「ゼデキヤ王はレメゲトンの称号を与えることを躊躇なさるの。本当に王の信頼を得られない限り悪魔との契約まで漕ぎ着けないわ。ゼデキヤ王が即位されてから、悪魔との契約で命を落とすものは出ていない……それはひとえに王の判断力と人を見る力が優れているおかげよ」
「帰って来なかったり命を落としたりしたのは昔の話だ。近年では堕天以外のコインは使わないことになっている。扱いづらいコインをわざわざ起こすこともあるまい」

「だてん」
ガキは自分の台詞の中から、また難しい単語に反応したようだ。
「クローセルさんも同じことを言ってたよ。だてんだから翼がある
って。だてんって、なあに？」
「天使から悪魔になった人たちを、堕天と呼ぶのよ」
「クローセルさんも、マルコシアスさんも、アガレスさんも？」
「そうよ。他にもたくさんいるわ」
「フラウロスさんは？」
ガキが聞いた。当たり前の疑問だろう。
「フラウロスは違うの。彼は最初から悪魔よ。オレンジの大きな豹
の姿で、恐ろしい地獄の業火を操ると言われているわ。焼き殺され
たレメゲトンも数知れない。アガレスとは比べ物にならないほど苦
労するはずよ」
「だから今回のゼデキヤ王の考えが理解できんといっているんだ」
「怖い悪魔さんなんだ……」
そうだ。アガレスとは比べ物にならないくらい残虐で、何人もの
レメゲトンの命を奪ってきたコインだ。
「それだけゼデキヤ王はラックの能力をかっているということね。
まあ、でもそれはまだ先の話よ。とりあえずはアガレスと契約した
事でレメゲトンとしての地位を確立できるわ。フラウロスと契約す
るのは何年も先でいいの」
「そういうものなんだー」
「当たり前だ、このくそガキ」
契約を何度も何度も行うことは、それだけ多く命の危険にさらさ
れるということである。
待っているこっちはたまったものではない。
「ガキって言うな！」
「そう何度も命を賭けられてたまるか」
契約へ向かう直前に思いが爆発して行動を起こすほどに不安だっ
た。心配だった。もう帰ってこなかったらと思うといても経っても

いられなかった。
　また思い出してしまって顔をしかめると、ガキはなぜか自分の顔を上目遣いに覗き込んできた。漆黒の瞳が真直ぐに向けられて、動揺した。
「何を見ている」
　やはりそう突然優しくなれるはずもない。
　いつものように仏頂面で返してしまった。
「もしかして、心配してくれた？」
「していない」
　また、これも嘘だ。
「何言ってるの、もちろんしてたわよ」
　ねえさんが代わりに答えてしまう。
「たとえあなたが3ヶ月帰って来なくてもアレイはずっとこの部屋に居たでしょうね。」
　ちくしょう、まったく……
「でも、本当よ。今回は半日で戻れたけれど、次もそうだという保証はない。むしろ今回が歴史的に見ても稀有なくらいに簡単だったのよ。本当によかったわ、無事に帰ってきて」
「うん、分かった。悪魔さんと会うときは、すごく気をつけるよ」
　素直に頷いたガキに、少し複雑な思いを寄せる。
　気づいて欲しくないという気持ちはあるが、こちらがあれだけ恥ずかしい思いをしたのだから、もう少し何か変化があってもいいんじゃないのか？
「じゃあ、戻りましょう。少し遅くなったけれど昼食よ」
「はあい」
　だが、ねえさんにこりと微笑んだガキの屈託ない笑顔を見ると、そんなことどうでもよくなった。

SECT．21　疼ク心ニ

普通は何日もかかる契約をたったの半日で終わらせて帰ってきたガキにはおよそ1ヶ月間の休暇が残っている。契約と回復にかかる期間を約一ヶ月と換算し、レメゲトンを治める王からそれだけの猶予が与えられるからだ。

昼食を済ませた後にそれを聞いてガキは首をかしげた。

「あれ？　そしたらおれはその間どうしたらいいんだ？」

「アガレスと話しなさい、いろんなことを。彼は博識よ。彼の言葉は難しいかもしれないけれどとても勉強になるはずだわ」

「わかった」

「あとは、アレイとマルコシアスに稽古をつけてもらいなさい。あなたは、左手が使えなくても戦える方法を学ばなくてはいけないわ」

「……わかった」

ガキ自身も自分の左手がもう死んでしまったことを承知しているようだった。

ピクリとも動かない左手をちらりと横目で見て、唇を引き結ぶ。

「明日の午前中にはお医者さんが抜糸してくれるそうよ。午後にはもう包帯なしで動けるでしょう。そうしたら、まずは買い物にでも行ってきなさい。市場に行きたいんでしょう？」

「行っていいの？」

「今日がんばったご褒美よ。アレイ、一緒についていってあげて」

どうしてそんな話になるんだ。

「何で俺が……」

「一人で町に出すわけには行かないでしょう」

「ねえちゃんは行かないの？」

「私は用事があるのよ、ごめんなさいね。大丈夫よ、アレイが連れて行ってくれるから」

「うん、わかった！」

「ガキのお守りなんか真っ平だ」
ふいとそっぽを向くと、ねえさんが含みのある声できっぱりと言った。
「あら、何を言ってるのかしら。一日でもラックと遊びに行けるのを許した私に感謝なさい」
「っ！」
ああ、何で俺はこのねえさんの目の前であんなことをしてしまったんだろう。
ねえさんに苛めてくれと宣言したようなものじゃないか！
「だいたい相手がラックじゃなければあの時とっくに気づいてるわよ？　これ以上隠す理由なんてないと思うけれど？」
「若造が……」
「くそっ……」
あんな場面を見られてしまったのでは言い逃れできない。
頬に熱が灯る。
恥ずかしいのと照れくさいのとでとにかくこの場を離れたくなった。ガキが気づいていないのをいいことにねえさんの攻撃は容赦ない。
と、思っているとガキが唐突に叫んだ。
「アレイさんおれのこと嫌いなんだろ！」
その瞬間ねえさんが苦笑した。くそじじぃさえ笑いをこらえている。
というか、ガキの頭の中のブラックボックスはどこをどうやってそんな結論を導き出したんだ？！
思わず顔が引きつりそうになる。
ああもう本当におれにはこのガキが理解できない。なぜ自分がこれを『一つだけ』に選んだのか本当に分からない。
「報われないわねえ、アレイ」
失恋の痛みというよりは理解できないもどかしさで言葉が出なかった。

ガキは相変わらず年相応でない顔で唇を尖らせた。
おそらくこの部屋の中で最もこの状況を楽しんでいるであろうファウスト女伯爵が嬉しそうにガキに聞いた。
「ラックはアレイ好きなの？」
いったい突然何を聞くんだ？！
声も出ない。怒ったというよりは驚いたという感覚で思わずねえさんを睨みつけた。ねえさんはいたずら好きの猫のような目で興味津々にガキを覗き込んでいる。
ガキは少し首を傾げた、がすぐにこう言った。
「んとね、声が好き」
「？！」
「いろんな事教えてくれんのも好き。でも……」
でも、の後に続く言葉が予想できない。とにかくいいことでないのは確かだ。
もう逃げたい。
「口が悪いとこは嫌い！」
その瞬間にねえさんは大爆笑した。
「他には？」
「えっと、何か考えてるみたいな時の顔は好きだけど、きゅって眉間にしわがよってるときはあんまり好きじゃない」
仏頂面で悪かったな！
「あ、でもねでもね」
「何？」
「普段アレイさんを見てるのは好き！　アレイさん、すごく綺麗だもん。ミメウルワシイってアイリスとリコリスも言ってたよ！」
もう勘弁してくれ！
席を立って部屋の扉に向かった。
ガキはきょとんとした顔をしていたが、いつものことだ。それは見なかったことにした。
ドアを閉めて、部屋の外の壁にもたれかかってとりあえず心臓の

鼓動を落ち着ける。
『声が好き。』
あの瞬間に心臓が跳ね上がった。
「はぁ」
ガキが自分のことを恋愛とかそんな目で見ていないことは知っている。それでも好きと言われれば嬉しいし、その言葉に一喜一憂してしまう自分がいる。
別に伝わらなくても構わない――いったいいつまで我慢できるのかしらね。
ねえさんとの会話がよみがえる。
本当にその通りかもしれない。
こんな一言で揺れる。感情にこれほどの振幅がある事に初めて気づいた。
「はあ……」
ため息が癖になってしまいそうだ。
何もかもおかしい。あのガキに会ってから。あの笑顔を知ってから。
気が狂いそうな感覚と明かりが灯ったような穏やかな気分が同居して胸の中を何かが渦巻いている。
一緒にいると暖かな気持ちに包まれるけれど、同時に心のどこかにぽっかりと穴が開いたように切なくなる。
表裏一体、正反対の気持ちがせめぎあう。
人はこれをなんと呼ぶのだろう。自分の心をもてあまして、飲み込みきれない気分をどうやって抑えているのだろう。会いたいのに、話したいのに実際目の前にするとうまくいかない葛藤をどう処理すればいいのだろう。
――本当に、気が狂いそうだ。
このままではいけない。
とにかく体を動かすべく建物を出て歩き始めた。

SECT．22　嵐ノ予感

城には遠方、時には国外からの客も多い。
王の職務が忙しくなかなか謁見できない上客のために、散歩用コースも存在する手入れの行き届いた庭が広がっている。
夏に向かうこの時期最も目立つのは淡い橙の花弁を開く愛らしい花だ。東方から渡ってきた種を先代ヨヤキン王が気に入り一面に植えたのだという。名は確かヤマブキ、と言った。
腰より低いくらいの位置に並んで風に揺れる様が黄色の絨毯のように見えた。
天頂を少し過ぎた太陽はじりじりと照りつける。夏が来るのは時間の問題だろう。だが、風はまだ春の涼しさを含んでいる。木陰で休むにはうってつけの季節だ。
根元で昼寝をするにはちょうどよさそうな木を見つけ、根元に座り込んだ。
足を伸ばして幹にもたれかかると眠気が襲ってくる。
なんだかんだ昨日は心配のあまりほとんど睡眠をとっていない。ついでに体力回復をはかろうか……と迷っていると、唐突に後ろから声がした。
「何だ、休憩中か？　レメゲトン殿」
若々しさが残る爽やかなテノール。
振り向くと、木の裏から漆黒の騎士の正装を纏った男性が現れた。身分の高い騎士の衣装に似合わぬ薄汚れた黒のバンダナをしており、声に似合う涼やかな笑みを唇にたたえている。
「……フォーチュン侯爵」
「よそよそしい呼び方をするな、アレイ」
「お久しぶりです、義兄上」
その騎士――クラウド＝フォーチュン漆黒星（ブラックルビー）騎士団長は、義弟の隣に腰を下ろした。

「無愛想はあまり変わっていないようだな、アレイ」
「申し訳ありません」
「いや、それはお前の長所だと思っているよ」
どうして無愛想が長所なのか。
全員何を考えているのか全く分からない――ねえさんも、姉上も、この義兄上も……あのガキも。
王国に12ある騎士団のうち最強と呼ばれる3つのうち漆黒星騎(ブラックルビー)士団長を務める義兄上は子供の頃からずっと憧れの存在だった。自分が15歳で炎妖玉(ガーネット)騎士団に入った頃にはすでに若干22歳で副団長になっていた。
それから10年近くたった今では名実共に騎士団長という職がすっかり板についている。
騎士道に全力を注いだ結果、結婚は少々遅く29歳で姉と籍を入れたが子供はまだいない。義兄自身兄弟がいないせいもあってか自分に目をかけてくれることが多かった。
「剣の稽古は欠かしていないかな？」
「はい。マルコシアスにしごかれています」
「では今度手合わせ願おうか。王都に在住するようになるとゼデキヤ王から聞いているよ」
「ぜひよろしくお願いします」
1年前よりは格段に強くなっている自信がある。それを確かめてみたい。
「それはそうと……」
義兄は翡翠(ジェイド)の瞳で自分を覗き込んだ。
「やっとお前にも大切な人が現れたらしいね」
「……誰がそんなことを？」
「もちろん愛すべき我が妻から」
つまりは、姉上が話したということだ。
すっかり癖になってしまったため息を盛大に吐き出した。
「いや、心配していたんだよ。私のように30近くなってからでは

妻になってくれる人を探すのも大変でね」
いや、そんなことはないだろう。
国家騎士団長に嫁入りしたい女性などごまんといるはずだ。
特にこの義兄は飛びきり美人の姉上が隣に立っても見栄えのする眉目の整った美男子だ。とても三十路を超えたとは思えない爽やかさと根っからの騎士道精神による優しさで数多の女性を虜にしてきたはずだ。
「何でもグリフィス家の末裔だという話じゃないか。それも、絶世の美女だとか。鋭い観察眼を持ち、ファウスト女伯爵が大切に3年間教育した秘蔵っ子という話だぞ」
どうも話に尾ひれがついている気がする。どうしてそんな話になっているんだ？
あながち間違ったことは伝わっていない気はするが、いかんせん大げさだ。しかも『鳥頭』の『阿呆』だという肝心な情報が付随していなければあのガキのことを説明できたとはとてもいえないだろう。
まあ、人の噂などそんなものだ。
「とにかく義兄上も一度お会いしてみてください。そうすれば分かるはずです」
「自信満々だな！　ぜひ紹介して欲しいものだ」
「……」
別にあのガキと自分はそんな関係ではない。
いったいどういう関係なのかと聞かれるとそれはそれで困るのだが・・・
眉を寄せて考え込んでいると、義兄は少しだけ表情を引き締めた。
「では、噂はこのくらいにして少しだけまじめな話をしようか？」
「何でしょう」
「戦のことだ」
「！」
唐突に現実味を帯びた話になって、思わず義兄の顔を覗き込んだ。

「おそらく時間の問題だ。ゼデキヤ王は回避すべく奮闘されているが、セフィロト国は完全に戦の姿勢を打ち出している。騎士団のほうにも気を引き締めるよう伝えてある。特にセフィロトとの国境を守る炎妖玉騎士団にはな」
「それほどまでに……」
「これまでもさほど仲が良かったわけではないが、現ネブカドネツァル王が就任してからは特に好戦的な姿勢を強めてきた」
3年間。自分が騎士の道を諦めてからたったそれだけの期間しか経っていないのに、情勢は刻一刻と変化していく。
「カトランジェの街にセフィラが現れたことも聞いた。内定にセフィラを派遣するとは、ネブカドネツァル王も本気だ。アレイ、お前が捕まえたのだったな？」
「はい」
銀髪に群青の瞳のセフィラを思い出す。彫刻のように整った顔立ちと肌の白さが人間離れしていて、戦闘能力も現在の自分とはる強さだった。
そう、そしてあのガキはセフィラに心奪われているのだ。
会いたい会いたいと繰り返したガキは必死だった。その様子を思い出すだけで心のどこかが重くなる。
少し視線を落とした自分には気づかぬ振りをしてくれた義兄は言葉を続けた。
「明日には処刑が行われるらしい」
「当然の処置です。もっと早くてもおかしくない」
「ああ、そうだ。セフィラを普通の獄で一般兵の見張りの下で閉じ込めて置けるはずがない。おかしいと思わないか？」
「……あのセフィラはまだ一回も天使を召還していません」
「そうだ。あの二人のセフィラはまだ切り札を隠し持っている。捕まった事も内偵手段の一つではないか疑ってかかるくらいでないと駄目だ」
「分かりました。気をつけます」

「ファウスト伯爵に寄ればあの二人は第６番目の『ティファレト』らしい」
「とすれば召還するのはミカエル――メタトロン、サンダルフォンに次ぐ天使です。こちらも悪魔を召還せねば勝ち目はないでしょう」
「……アレイ」
「はい」
「用心せよ。嫌な予感がするのだ」
「分かりました」
これまでの経験上、この義兄の勘はよくあたる。
ふいに胸騒ぎがした。
「すみません、少し……戻ります」
「ああ、呼び止めてすまなかったな。今度その新しくレメゲトンになった女性を連れてぜひ遊びに来るといい。きっと妻も喜ぶ」
「はい」
深く礼をしてからすぐ神殿へ向かう。

神殿の隣には何日も王都に滞在する客が宿泊する建物があり、先ほどまで昼食をとっていたのもそこだ。
今度はヤマブキの花に目を奪われることなくまっすぐに戻ってきた。
先ほど昼食をとった部屋に入ると、テーブルに着いているのはくそじじぃ一人だった。
「じじぃ。二人はどこ行った？」
「人にものを尋ねる時はもっと丁寧な口をきくもんだ、若造」
「教えてくれ。嫌な予感がする……！」
「……」
くそじじぃは少し迷っているように見えた。
「まさか！」
「じぃ様には想い人に会いたいという孫を止められんのだよ」
「くそ！」

よりにもよってあのセフィラに会いに行くなんて。
危険だということは誰よりねえさんが分かっていたはずだろうに！
間髪入れずに駆け出した。神殿にもジュデッカ城本館も素通りし、真直ぐに囚人を収容する塔へと向かう。
昔は大嫌いだった真っ暗な階段を何段も飛ばして駆け下りた。
その時点で何かが壊れる音が地下に大きく響いた。
十以上並ぶ牢獄の前を駆け抜けて目に入ったのは……天使ミカエルを召還したセフィラの姿だった。

SECT．23　殺戮ノ悪魔

セフィラはとうとう天使を召還した。
頑丈なはずの檻は物理的とは思えない力で完全に粉砕されており、その前にはガキがへたりと座り込んでいる。
迷っている暇はない。もう一度叩き潰して、今度こそ完全な状態で処刑するのみだ。
「マルコシアス！」
そう叫べばいつものように加護を受けた状態で戦えるはずだった。
天使を召還したセフィラがいる以上、少なくともマルコシアスの助けがなければ互角には戦えまい。
だが、魔方陣は発動してもマルコシアスは姿を現さなかった。
「どうした……？」
はるか昔セフィロト国と戦をしていた時代がある。その時代のレメゲトンが書き記した言葉――『堕天の悪魔は本物の天使の前で姿を保つことはできない』
ただの伝承だと思われていたそれが頭の中でフラッシュした。
「くそっ！」
ねえさんの姿が見えない。すでにセフィラにやられてしまったというのだろうか。
次の瞬間、ガキが絶叫がこだました。
「うあああああああ！！」
全く何が起こったか分からない。とにかくセフィラとの間に立ち塞がってガキを見たが、怪我をした様子もない。ただ額には見たこともないような複雑な紋章が浮かび上がっていた。深い群青色のそれはまがまがしい光を放ち、それ自体がガキを苦しめているように見えた。
どさりと地面に倒れこんで苦しみから逃れるように床を這ってもがいている。

「たすけ……て……」
漆黒の瞳には光がない。
セフィラに幻影か何かを見せられているのか？！
「いやだあああ！」
絶叫が耳に突き刺さる。
とにかく気を確かに持たせるしかない。
腹の底から搾り出すようにして叫んだ。
「起きろ、くそガキ！」
その瞬間、ようやくガキの瞳に光が戻った。
少しだけほっとしてセフィラのほうを睨みつける。
「貴様はまた邪魔をするのか……」
銀髪のセフィラは頭上に天使の姿を戴いて、忌々しげに呟いた。
背後ではガキの荒い息遣いが聞こえる。いったいこいつに何をされたというのだろう。
許さない。ぜったいに殺させない。触れる事だってさせない。
セフィロト国神官セフィラ、第６番目ティファレト――使役するのは美のミカエル。流れる銀髪が群青の瞳を嵌め込んだ美しい顔を縁取っている。左手に銀色の剣を携える姿は天使軍の長にふさわしい。
「マルコシアスの加護がない貴様など敵ではない！」
天使の前で堕天の悪魔は呼び出せない……それはただの伝説だと思っていたが、本当だったようだ。
それでも負けない。後ろにいる少女を傷つけることは許さない。
銀髪のセフィラは光り輝く銀の剣を作り出した。
この間のように油断することはない。
慎重に剣を構え、相手の攻撃を待った。自分から攻撃するのはタブーだ。マルコシアスが自分に重点的に教えた剣は柔の剣、攻撃を仕掛けるよりカウンターで返すことを主とする。
これでこのセフィラと向き合うのは４度目だが、これまでで最も集中していたと言える。

敵の剣先の軌道までがはっきりと見えた。
「キィン」
軽い音で剣筋をそらし、体勢を崩させて攻撃に転ずる。それが基礎の型だ。
が、手本どおりにうまく捌いても敵のバランスが崩れる様子はない。完璧に決まったはずの技がなぜか間一髪であたらない。
それどころか受け流している方の自分が押されてきた。
これが加護の有無の差なのか……？
一瞬の焦り。
その隙を突かれて攻撃が激しくなる。
「ガンッ」
受け流すのが厳しくなってさらに押されてきた。
まずい、と思った次の瞬間だった。
「死ね！」
自分の剣が跳ね上げられる。
完全に体の全面のガードが空いた。
「！」
はっきりと相手の剣先が自分の腹部を大きく切り裂くのが見えた。
しまった。
間髪いれず第二激が追ってくる。
「ぐあっ！」
激しい痛みに一瞬目の前に暗幕が下りた。

闇の空間が広がっている。
かすむ視界に銀髪のセフィラとガキの姿が目に入った。どうやらガキ自身がセフィラと対峙しているようだ。
無茶な。
セフィラの実力はよく知っている。ガキのかなう相手ではないはずだ。

何とか立ち上がろうとしたが、それどころか体が動かない。指先さえピクリとも動かない。まぶたを押し上げているので精一杯だ。
緊迫した空気がその場に張り詰めていて、その静寂を破ったセフィラの低くよく通る声が響いた。
「器の差だな。読み誤ったろう」
銀のブレイドを閃かせたセフィラがにやりと笑う。いったいどういうことだろう？
それにつられたようにガキもにやりと笑う。
が、その表情はいつものものではない。残酷さと冷酷さを秘めた殺戮者の微笑――それはおそらく悪魔のものだ。
「読みアヤマったノは　そっちダ　僕はもともト　剣士ジャない」
まさか……ガキの体が悪魔に乗っ取られている？！
この闇の空間はあの悪魔が作った特殊空間というわけだ。ティファレトの天使を包み込む空間を作り出す力を持つなど、あの悪魔はいったい何者だ？
次の瞬間、ガキの体が一瞬でセフィラの懐に飛び込んだ。
黒髪が一瞬漆黒の空間に靡く。
遠くて何が起きたか分からないが、ガキは――というかガキの体を乗っ取った悪魔はそのセフィラに飛びつき、蹴り飛ばすようにして離れた。
「僕ハ　サツ戮と滅びの悪魔　グラシャ・ラボラス　武器は　剣ジャない　この牙ダケだ」
その言葉に愕然とする。
グラシャ・ラボラスだと……？
確かにガキはあのコインを持っていたが、未だ契約はしていないはずだ。
ガキの姿をした悪魔は口から血を吐き出した。顔から首筋、とくに口の周りが真っ赤な血で染められていた。象牙色の肌に浮かび上がるそれは胸を裂くようなおぞましさを浮かべていた。おそらくセフィラの懐に飛び込んで一瞬で首筋に牙を立てたのだ。

血に塗られてゆらりと闇の空間の中にたたずむその姿はまさに殺戮の悪魔――

心臓がどくりと脈打った。

全身に痛みの感覚が戻り始める。

気の遠くなりそうな痛みに思わず顔をしかめた。

その瞬間に特殊空間が解除されて、目の前に地下牢獄の光景が戻ってきた。

SECT．24　帰レト呼ブ声

「くソっ　まあイイ　次ハ　逃がサない」
忌々しげな悪魔の声でガキが呟く。動かなくなったはずの左手で口元をぬぐい、ぎらぎらとした漆黒の瞳をぎろりと周囲に向けた。
セフィラの姿も天使の姿もなく、逃げてしまったものと思われた。
自分の体が動かないうちにすべてが終わってしまった……いや、終わったわけではない。
ガキの体にはまだグラシャ・ラボラスが残っている。
「約束ドオリ　左ウデ　貰うヨ」
そう響いて、ガキの体から黒い霧が噴出した。
その霧は収束し、悪魔の体を形作る――伝説に伝え聞くグラシャ・ラボラスの姿そのものを。
闇色の毛並みに映える地獄の業火を閉じ込めた炎妖玉（ガーネット）が不気味に煌いて、犬歯が飛び出した口には先ほどの血がこびりついている。背の翼は蝙蝠のような膜翼だ。
悪魔はガキに擦り寄ると、左腕を牙で持ち上げた。
いったい何が起こるのか分からなかった。殺戮の悪魔グラシャ・ラボラスに乗っ取られたガキがセフィラを取り逃がし、さらにはその悪魔と契約を結んでいるという目の前の光景は信じがたいもので、とても現実とは思えなかった。
ただ、痛む体は指一本さえ動かせずその光景を目に映すことしかできなかった。
「っあああっ！」
ガキが悲鳴を上げた。
その悲鳴が胸に突き刺さった。傷の痛みよりもっと重いものが心を貫いて押しつぶした。
血がほとばしっている。がりがりと何か硬いものを砕く音がする。
「ぐっ……あああ……」

左腕から血を大量に流したガキはよろよろと壁にもたれかかった。
くそっ、動け。動いてくれ……！
命令を送るだけで脳髄を揺さぶられるような痛みが走る体を叱咤して無理やり上体を起こす。
ぱたた、と床に血が散った。決して浅い傷ではない。服の前面がじっとりとぬれている。ずくんずくんと傷が疼いた。
「ありがとう……ラース。助かった……」
ガキがポツリと呟いた。
どうしてありがとうなんて言えるんだ。左腕を喰われて、ぼろぼろにされて、それでもなぜそんな風に微笑むことができるんだ。
もうやめてくれ。
頼むから……
悪魔は消えて、ガキは生き絶え絶えに壁にもたれかかっている。
重い体を引きずってその場所までたどり着いた。
「……くそガキ」
漆黒の瞳には光がなかった。
あまりのショックでどこか意識が飛んでしまっているようで反応しない。今だって果たして目の前の俺の姿が意識の範疇にあるのかすらも怪しい。
それでも唇の端をあげて、満足げに微笑んだ表情で中空を見つめている。
その微笑みはどうしようもなく胸を締め付けた。
状況は何も分からなかった。ただ、目の前の少女が悪魔と契約を交わし、敵を撃退したということと、その衝撃的な体験のために茫然自失の体になっていることだけが理解できた。
「もう笑うな」
辛い時には笑わなくていいんだ。泣いていいんだ。
血まみれの頬にそっと触れる。指先の感覚がはっきりしなくて手のひら全体で包み込んだ。漆黒の瞳は全く力がない。
このまま少女が糸の切れた人形のようになってしまう気がして怖

かった。
「ラック」
名を呼んだのは初めてかもしれない。一瞬、漆黒の瞳の光が揺れた気がした。
守りたかったのに。
何者からも、どんな辛いことからも守ってやりたかったのに。
それなのに……！
指で血をぬぐった。それでも微かに除く歯にも唇にも大量の血液がこびりついている。敵のセフィラの血なのかこいつ自身の血なのか分からない。
冷たい頬を何度もぬぐって、でもそれでも血はぬぐいきれなくて……心の痛みが突き刺ささったとげのように抜けない。
虚ろな瞳はどこに視点を向けることがない。初めて出会った時の人形のような彼女がもう一度目の前に浮かぶ。
もう二度と動かないのではないかという恐怖がむくむくと頭をもたげる。
そうだ。ねえさんが言っていた。見つけたとき記憶も声もすべてをなくしていたと。
もう一度そんな状態になってしまったら……？
「帰ってきてくれ」
心が壊れてしまえばもう二度と会えない。
笑顔を守りたかったけれど、それはそうやって辛い時にまで笑うって事じゃないんだ。本当に守りたいものは――もっと大きくて暖かなその心なんだ。
何もかもを受け入れて、周囲に太陽のような暖かさを与えることができるお前の心そのものを守りたいんだ。笑顔は心が表れた一端に過ぎないから。
辛いなら泣いたらいい。ずっと傍にいてやるから。
「ラック」
守ると決めたのに。

「戻ってきてくれ。会いたいんだ」
そんな言葉が自然に滑り落ちた。
心から人を大切に思い、どんなものでも包み込めるお前に会いたいんだ。
このまま心が壊れてしまわないように俺がいくらでも支えになってやるから。頼むから帰ってきて欲しい。
ねえさんが見つけ、3年間育ててきた魂をここで失うようなことはしたくない。
帰って来い。
肩に手をかけて首筋に額を押し当てる。血の匂いが鼻をついた。
「頼むから――」
声が聴きたい。
あの暖かな微笑をもう一度見たい。
阿呆面でいい、光の灯った瞳に会いたい……
「……ぅ……」
微かな声にはっとした。
「ラック！」
「ぁ……」
少しずつ焦点が合い始めた瞳。
「しっかりしろ！」
まっすぐに目を見つめて呼びかけた。
光が差し始めた瞳は力なく、しかしはっきりとこちらを見返した。
「アレイ、さん」
「ああ……」
思わず感嘆の声が漏れた。
漆黒の瞳は迷わず自分を見つめていて、少女はふわりと微笑んだ。
その微笑に言葉を失ってしまった。
「どうしたの？泣きそうな顔……してるよ？」
「お前はいつもそうだな。」
血が気管に入ったのか少女は軽くむせた。

軽く背を叩いてやるとすぐに落ち着いた。
「大丈夫か？」
「だいじょうぶ。それよりアレイさんこそ……」
「そうやっていつも人のことばかりだ。そんなところは」
一瞬迷った。
「……嫌いじゃない」
「ほんと？」
少女は嬉しそうに笑った。
きっと自分はこんな笑顔が見たかった。
安心してきたら腹部に受けた傷が痛み出した。少女のほうもかなり衰弱している。左腕も悪魔に喰いちぎられたはずだ。
「戻ろう」
少女を腕に抱えあげた。
相変わらず軽かったが、少女が肩に額を押し当てた。
「あったかい」
そうやって小さな動物のように擦り寄ってくる様子が気恥ずかしくて、思わずもとのぶっきらぼうな口調に戻ってしまった。
「寝ろ。今外に連れてってやる」
「うん」
少女は目を閉じた。
手足から力が抜ける。きっと今まで緊張で張り詰めていたんだろう。

そう思って視線を前に戻すと、ちょうどねえさんが起き上がっていた。
「ねえさん」
「……ラック？」
どうもねえさんはこの少女しか目に入っていないようだ。
「いやあああ！」
空気がびりびりと震えるような声で叫んだねえさんは一瞬で駆け

寄ってきた。
　そうだ、ぐったりとして血まみれの少女はどう見ても尋常でない怪我をしているように見えただろう。
「大丈夫、これはこのガキの血じゃない」
「ああ、そうなの……」
　言ってからねえさんははっとしたように俺を見た。
「アレイ！」
「半分くらいは俺の血かもしれん」
　腹部の傷はかなりの量の血を流れさせてしまったようだ。
　気を失う前にガキを運んでしまわなくてはいけない。
「真っ青よ、あなた！　ひどい傷……」
「とにかく……上に……」
　血が足りずふらふらとする頭を抱え、よろよろと階段を上りきるともう西に傾いた太陽が出迎えてくれた。
　ガキを建物に運び込んですぐ俺は意識を失ってしまった。
　やっぱり血を流しすぎたのが原因だったらしい。

SECT．25　深マル謎ト

目が覚めたときにはすでに腹部の傷は縫合も終わっていて、国家医師の一人が2週間は安静にしていてください、と言った。
少しずつ先ほどのことを思い出しながら天井を見つめていると、ねえさんが入ってきた。
「だいぶ血が足りないそうよ。傷も深いし……当分安静ね」
「こんなもの大丈夫だ」
腹筋に力を入れて起き上がろうとしたが、麻酔がまだ効いているのかうまく起き上がることができなかった。
「無理しないで。ラックも無事よ、ほとんど無傷だとベアトリーチェが言っていたわ」
「……そうか」
それで十分だ。
だが、それはおかしいことにすぐ気づいた。
「じゃあ、左手はどうなったんだ？」
「グラシャ・ラボラスがあの子に新しい左腕をくれたわ。ただ元と違うのはコインが埋め込まれてしまっているということくらいかしら。切れた筋も戻っていて、動かすのに全く支障はないみたい」
「何だと……？」
悪魔が左腕を与えるなど、きいたことがない。
いや、驚くべきはそれよりも……
「あのガキはいったいいつグラシャ・ラボラスと契約したんだ？」
「分からないの。少なくとも私があの子に出会う前よ……全く気づかなかったわ。何よりグラシャ・ラボラスと契約する人間がいるなんて思いもしなかったもの」
「だろうな」
歴史に残る限りグラシャ・ラボラスを使役したのは稀代の天文学者ゲーティア＝グリフィス本人だけだ。その後何人もの血を吸った

コインはいつしか殺戮と滅びの悪魔として契約を交わそうとする者はいなくなっていた。それも数十年前のグリフィス家の滅亡と共に行方知れずになっていたのだ。
「私にも分からないことだらけよ。ゼデキヤ王にもなんて報告していいかわからないわ」
「……何があったのか最初から話してもらえるか？」
「ええ」

あの後ねえさんは、明日に処刑を控えたセフィラに会わせるためガキを地下牢獄へと連れて行った。処刑前最後に会えるチャンスだろうとくそじじいが手引きしたらしかった。
ところが案の定あのセフィラはやはり戦闘意欲をむき出しにガキに突っかかり、天使を召還して牢を破壊し、ねえさんを吹っ飛ばしたところに俺がちょうど着いたらしい。
というのがねえさんのあらすじだった。

「一つだけすごく気になることがあるの」
「何だ？」
「ミカエルの姿を見て、あの子の額に何かの紋様が浮かび上がったのよ」
「紋様？」
「ええ。コインの紋様ととてもよく似ているけれど、72個のうちどの象徴とも違っていたわ。それもあの子はあの天使のことを『ミカエル』と呼んだ――そんな名前これまで一度も教えていないのに」
「全てはガキが失くした記憶の中……か」
「ええ。後でクローセルを呼び出して聞いたのだけれど、全く要領を得なかったわ。何か知ってて隠しているというか、話したくない様子というか……」
「その紋様に悪魔が関係しているのは間違いなさそうだな」
ねえさんは無言で頷いて少し神妙な顔つきで黙り込んだ。

その沈黙は果てしなく重く、これから行く先の困難を暗示しているようで息が詰まった。

しばらく休むと麻酔が切れて鈍痛が襲ってきた。痛みはあったが起き上がることは出来たし、立ち上がることもできた。

ゆっくりと立ち上がって近くにあった服を着なおすと、隣の部屋からねえさんと……あのガキの声がした。

そっとドアを開けると相変わらずの阿呆面で笑ったガキが最初に目に飛び込んできた。

ほっとして思わずいつもの言葉が滑り出る。

「くそガキが間抜け面してんじゃねえ」

「ガキって言うな！」

案の定ガキはいつものようにぱっと振り返って主張した。

が、その顔がみるみる歪む。まるで泣きそうな顔で自分を見ている。

「だいじょうぶなの？　ひどい怪我したんじゃ……」

自分の体を見下ろすと、腕や首筋から包帯が見え隠れしていた。

「こんなものはかすり傷だ」

そう言うとねえさんがあきれたようにため息をついた。

その後ろにはレメゲトンの一人、ベアトリーチェ＝アリギエリ女爵の姿があった。

「やせ我慢しちゃって。このぶんじゃラックと一緒に1週間はお休みね」

本当は医者に2週間安静にしろといわれている。

「俺はすぐにでも動ける」

「嘘おっしゃい」

ぴしゃりと言い込められて思わず口をつぐんだ。

すると、ガキがてくてくと近づいてくる。

「ごめんね、痛かった？」

下から見上げるようにして大きな漆黒の瞳を泣きそうに潤ませている。
その顔は反則だろう！
叫びたかったがぐっとこらえた。
「ありがとう、アレイさん。いつも助けてくれて」
心から『ありがとう』の気持ちをこめて微笑んだガキは先ほどの地獄のような光景から完全に回復しているように見えた。
お決まりとなった小さなため息を一つこぼして、ガキの艶やかな黒髪にぽん、と手を乗せる。
「だから……気がついたように素直なこと言うんじゃない。驚くだろうが」
するとガキはねえさんの前でするような阿呆面をして笑った。
初めて見るそんな安心しきった表情に、不覚にもどきりとする。
「アレイさんの手も好きだよ。あったかくて大きいもん」
そう言いながら右手で自分の胸元に触れた。
傷が少し痛んだが、それ以上に手のひらの感覚が温かくてほっとした――よかった、ちゃんと生きている。
ガキも心臓の鼓動で生きていることを確認するように自分の胸に手を当てていた。
「イジワル言わないアレイさんはすごく好きだよ。近くにいると安心するんだ」
幸せそうな顔で、こんなに近くで無垢な瞳で見上げられると心臓の拍動は高まっていく。
ガキにはそれが伝わってしまっているかもしれない。
「だから、どこにも行かないで」
「！」
驚くほど突然の告白だった。
「ここにいて！」
驚いて目を丸くした。
本当にガキの思考回路は全く読めない。相変わらず意味不明だ。

ブラックボックスだ。
抱きしめてやりたいと唐突に思った。が、ここにはねえさんもいるしアリギエリ女爵もいる。
それより何より自分は知っているはずだ。このガキがねえさんよりも俺のことを優先する日が来ることはまずない、と。
そうだ。そんなことあり得るはずがない。
冷静にそう判断してガキの肩に手を置いて遠ざけた。
そしてまっすぐに目を見つめて問う。
「お前はそこのねえさんに付いていくんじゃないのか？　それが望みだろう」
「うん。それは今も変わってないよ」
「なら俺はいらないだろう」
「おれはねえちゃんの隣にいる。でも、反対側の隣にはアレイさんにいて欲しいな」
やっぱりか。
そんなことだろうと思った。ガキの考えそうなことだ。
「それはまるで……母親と父親のようですね」
アリギエリ女爵が困ったように微笑んだ。
「アレイが父親っ！　ほんと、報われないわねえ、アレイ」
ねえさんは楽しそうに笑う。
もういい。やっぱり、気づいてもらえなくてもいい……というか、気づいてもらうのは無理だ。
どうしようもなく空しくなってそっぽを向いたのに、ガキはなぜか嬉しそうに笑った。
「あらラック、嬉しそうね」
「うん」
ガキの漆黒の瞳が真直ぐこちらに向けられる。
「アレイさんはおれが嫌いなわけじゃないんだよね？」
ねえさんはくすくす笑いながら答える。
「そうね。むしろ……」

「やめてくれ」
間髪いれず分断して、これ以上何か言われる前に退散することにした。
「俺は帰って休む。くそガキ、お前もとっとと寝ろ」
「ガキって言うな！」
ガキの声が後ろから追いかけてきたが完全に無視した。
今日は本当に疲れた。
大量の血を失ったのも本当だ。早く帰って眠るとしよう。

―――　オワリ　―――

朝の光が顔に当たっている。昨日は早く寝たのに、もう太陽が高まり始めている。
起きなくては。
そう思ったけれど、体は鉛のように動かない。もう少しだけ惰眠をむさぼることにしよう。
なんとなく風が頬を揺らしているのは感じていた。初夏も後半に入った朝の風は清々しい。ずっとこのまま眠りたい。
ところがそこに聞きなれた声が響いた。
「おはよう、アレイさん。遊びに行こうよ。起きて？」
しかしまだ覚醒するほどではない。
「ねえ」
その瞬間シーツをはがされた。
少しずつ頭が起きてくる。それと共に軽く体が痛んだ。ついでにうっすらと目を開けると、漆黒の瞳が近くにあった。
何でこんなところにいるんだ。
「……痛い？」
それが包帯に向けて発せられた言葉だと気づくのにも一瞬かかる。
「少しな」
まだ完全には覚醒できていない。
くそガキはベッドの脇にかがんでそっと包帯に触れた。痛くはなかったが触れたところから暖かな体温が伝わってきた。
「ごめんね。ありがとう」
「それは……昨日聞いた」
泣きそうな顔のガキを見ていたらどうしようもなく我慢できなくなった。
本当にどうしていつもいつも他人のことばかり……どうせまだ泣いていないんだろう。言葉を失くすほど、瞳の光を失うほどに辛か

ったくせに辛いなんて一言も言ってないんだろう。
近くにあった腕をつかんで強く引っ張る。ガキは抵抗もせず、ベッドの上に倒れこむようにバランスを崩した。
「うわっ……」
驚いているガキをそのまま腕の中に大きく包み込んだ。柔らかな黒髪が頬にかかって、微かに甘い香りがした。
心の底からほっとする。
それでも、無事でよかったと思うから。
本当によかった。
「俺のほうこそ……謝らねば」
「どうして？」
「お前を守れなかったから」
微かに残る記憶の中で、このガキは左腕を悪魔に食われ、悲鳴を上げていた。
その悲鳴は鋭く胸に突き刺さったままだ。
左手には滅びのコインが埋め込まれ、痛々しい様をさらけ出している。
「目の前で左腕を悪魔に砕かれた。俺にはどうすることもできなかった……」
「ラースはちゃんとおれに代わりの左手をくれたよ」
明るい声で答えようとする腕の中の少女がいとおしくて仕方がない。
胸が苦しくなるほどに切なくなった。
「でも、痛かったろう？」
そう問うと、答える代わりにぎゅっと肩にしがみついてきた。
どれほど痛かったか、苦しかったか、辛かったか……怖かったか。
それを考えただけでも胸が詰まる。
この華奢な肢体のどこであの衝撃を受け止めたのか。
どうしようもない感情が全身を駆け巡る。
目の前にいたのに。

もっと力があれば助ける事だって出来たはずなのに……！
「怖かっただろう。すまなかったな……」
うまく他に言葉が思いつかなくて、少女の耳元でそっとささやいた。
少女は肩を震わせながらますます強く肩に額を押し付けた。
「怖かった。おれの体が……おれの体でラースは銀髪のヒトを殺そうとしたんだ。血がいっぱい出て……鉄の味がして……」
消え入りそうな涙声で途切れ途切れに声を絞り出していた。
もういい。もういいんだ。
まるで恐怖を思い出して痙攣するように肩が震えている。
その震えも全部包み込むように少女を抱きしめた。少しでもいい、恐怖が拭い去れるのなら。
ここまで気丈に振舞っていた彼女が我慢せず少しでも弱みを見せてくれるのなら。
「怖かったよ……アレイさん。すごく怖かった……」
「よくがんばったな」
一瞬迷った。
でもそれは本当に一瞬で、その名前は自然に口から滑り出た。
「……ラック」
嗚咽が聞こえた。ほとんど声を上げずに少女は涙を溢れさせていた。
きっといつも泣かないように我慢しているんだろう。あのねえさんに嫌われないように、迷惑をかけないようにと。
でも、こうやって自分がいることでその我慢を少しでも和らげられたら。
言葉をかけずにずっと漆黒の髪をなでていた。
触れたところから体温を感じる。肩も胸も腕も頬も、じわりと優しい温度が灯ったようだ。
そのうちしばらくして、少女の肩の震えがとまった。もう一度強

く抱きしめると、少女は抵抗せず自分にゆだねていた。
少しは回復したようだ。
「よく泣いたな、くそガキ」
「ガキって言うな」
言い返してはいるが、ばつが悪いのか視線が合わない。
「だいたい、遊びに行くために呼びに来たんだよおれ」
「そうなのか？」
「そうだよ！」
漆黒の瞳がいつものように自分を見上げた。
それが嬉しくて思わず微笑んでしまった。
それよりなによりこのぬくもりをまだ離したくなかった。
「今日くらいゆっくり休んでもいいんじゃないのか？」
少女はゆったりと微笑むともう一度自分の肩にもたれかかった。
「そうだね」
少女は安心したように目を閉じた。

静かに音を殺しながらドアを開けて、ねえさんが部屋に滑り込んできた。
怒られるかと思ったが、ねえさんは軽く微笑んだだけだった。
「ありがとう、アレイ」
「何がだ？」
「この子はきっと放っておくと人に頼ることなんてしない。私の前では絶対に泣かないのよ？すごく……すごくつらかったはずなのに」
「……」
「お願いよ、アレイ。この子の傍にいてあげて。どこにも行かないで見守って」
「それはねえさんの仕事だろう？」
「いいえ、この子はきっといつか私よりもあなたを選ぶようになるわ」
「そんな事があるはずがない」

心の底からそう思ったが、ねえさんは悲しげに微笑んだだけだった。
ここのところ、ねえさんは少し変だ。
「今日は少し休ませてあげて。この子はあなたの隣がすごく好きみたいだから」
腕の中で完全に安心しきっている少女に優しく微笑みかけて、ねえさんは自分の頭をなでた。ずっと昔、幼かった頃にそうしてくれたように。
「いつかこの子もあなたを一番大切な人に選ぶでしょう。だから……」
少女の寝顔を見ていると、ねえさんの言うことがあながち間違っていない気もしてくる。
「絶対に離れないで。お願いよ」
ねえさんはそう言い残して部屋を出た。
窓の外からは温かな風が流れ込んでくる。腕の中では大切な少女が安らかな寝息をたてている。

本当に安心したように目を閉じた少女の涙に濡れた目元に唇を寄せた。
穏やかな呼吸を感じながら自分も少し眠ることにしよう。
例えばこの先もっと恐ろしい出来事が多く待ち構えていたとしても――

―――　オワリ　―――（後書き）

to be continued・・・

この物語は連作です。

【LOST COIN ―head―】 http://ncode.syosetu.com/n3660c/

【LOST COIN ―tail―】（本作）

【LAST DANCE ―head―】 http://ncode.syosetu.com/n4082c/

【LAST DANCE ―tail―】 http://ncode.syosetu.com/n4617c/

【PAST DESIRE ―head―】 http://ncode.syosetu.com/n6324c/

【PAST DESIRE ―tail―】 http://ncode.syosetu.com/n7899c/

【WORST CRISIS ―head―】 http://ncode.syosetu.com/n0921d/

【WORST CRISIS ―tail―】 http://ncode.syosetu.com/n0973d/

順にお楽しみください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3665c/

LOST COIN　-tail-

2010年10月8日14時09分発行